俳諧亭句樂

吉井勇

始

特106
534

現代脚本撰集の内

樂句亭諧俳

吉井勇

大正
5. 6. 21
内交

一現代脚本撰集は小山内薫これが撰に當る。
一此集に收められたる脚本はすべて無斷興行することを得ず。
一興行は勿論私演に際しても一應通一舍内川上邦基に交渉せらるべし。

小引

『俳諧亭句樂』は吉井君が嘗て公にした三幕物『狂藝人』（三田文學五ノ一）の第二幕及び第三幕に一幕物『俳諧亭句樂の死』（中央公論三〇四）を加へて、新たにこれを三幕物の戯曲に改作したものである。

吉井君が落語家「句樂」に關して嘗て書いた戯曲には、以上二曲の外、別に四幕物『無賴漢』（中央公論三〇七）があつた。『狂藝人』では句樂の二度目の發狂が描かれてゐ、『俳諧亭句樂の死』では句樂の死が描かれてゐ、『無賴漢』では句樂の死がその周圍の人物に遺

したinfluenceが描かれてゐた。

句樂を欣慕する良家の青年山崎新太郎と小間使おぎんとの戀の序幕が『狂藝人』から省かれ、これに句樂の死の一幕が加へられ、句樂に置いて行かれた盲目の落語家小しんの悲哀と藝人達の生活に漸う同化して行く新太郎の寂しい心とを巧みに叙した『無賴漢』の四幕が全然捨てられたのが、この『俳諧亭句樂』である。

『俳諧亭句樂』を單なる寫實主義或は自然主義の作品だとして了ふのは、甚しく作者の意圖を誤まるものである。勿論、この作にはこの作者の他の作には決して見られない細緻な寫實がある。併しながら、この作の基調を作りなすものは、世に落としめらるる

藝人に對する——殊に狂句樂(實は故蝶花樓馬樂)と盲小しん(實は柳家小せん)とに對する——作者の温かい同情と、彼等の生活に對する作者の深い憧憬とである。

吉井君の戯曲の特徴は飽くまでもその抒情詩的な所にある。同情可なりである。憧憬可なりである。私はそれを吉井君獨占の壇場だと思ふ。私はその意味から、この可なりに寫實的な戯曲をも一つの美しいLyrical Dramaとして江湖に推讃したいと思ふ。

舞臺技巧の巧みにして五分の隙もない事は言ふまでもない。句樂の死の一幕の如きは、全くこれを側面から寫して、しかも哀傷の氣を舞臺に汪溢させる手腕、斷じて凡庸作家の企て及ばざる所

である。

『俳諧亭句樂』の第三幕（卽ち元の『俳諧亭句樂の死』）は嘗て尾上菊五郎君の狂言座で實演された事があつた。その時の私の批評は、近々公にする筈の私の著『演劇論集』（日東堂發行）の中に收められてゐる。

一九一六、五、五

小山内　薫

俳諧亭句樂（三幕）

人物

小しん。（盲目の落語家。）

句樂。（落語家。）

馬馮。（同。）

柳橋。（同。）

おつた。（小しんの女房。）

おとし。（句樂の妹。）

山崎新太郎。（文科大學生。）
樫村虎彦。（新太郎の友達。）
おぎん。（新太郎の情婦。）
延美津。（清元の師匠。）
蝶丸。（盲目の新内語り。）
おせん。（蝶丸の女房。）

その外煙草屋の女房、近所の娘等出づ。

場所　東京、淺草。

時代　現今。

第一幕

淺草馬道の路次の奥にある句樂の家。

上手に句樂の家あり。路次は上手に通ずるものと、正面の奥に通ずるものと二つありて、句樂の家の前にて相交る。路次と路次との間に長家の一部現はる。

句樂の家と向ひ合ひて清元の師匠延美津の家あり。

句樂の家は、路次に向ひて格子戸あり。極めて狹き土間。格子戸と並びて（觀客より遠き方）竈所の障子。六疊と三疊の二間。正面は壁と押入。壁の前に本箱二個。その蓋には「軍書」及び「俳書」と記す。押入の前には芝居の番所など

を貼りたる古き枕屏風あり。柱には發句を書きたる短冊を懸く。上手は障子。その外には狹き空地ありて壞れたる箱庭植木鉢など散亂す。

第一幕と同じ日の午后三時頃。雪を催したる空模樣。

（句樂は褞袍を着て安火に當りつつ、しきりに句を案じゐる。傍に硯箱煙草盆などあり。時時獨語しては紙に句を書き付く。延美津の家よりは三味線の音聽ゆ。）

句樂。（筆を取り上げて。）ええと――道樂に身を持ちくづす春の風――（首を傾けて。）如何も何だか落ち着かねえな。成程こいつあ句樂が作りさうな句だと思はれなくつちやあつまらねえからなあ。（筆を置いて。）道樂だけを生かして置いて――道樂を――道樂をみなしつくして――ぢやあ秋の風だなあ。（錆びたる聲にて笑ふ。）

おとしの聲。（臺所より。）何を一人で笑つてゐるんだい。氣味の惡い――

句樂。默つてろい。今名句が出來さうなんぢやねえか。（二度筆を取り上げて。）ええと――道樂を人のほむるや春の風――（喜ばしげに。）めえ、うめえ、こいつあ名句だ。（紙にその句を書き付く。）

おとしの聲。兄さん。兄さん。

句樂。（慵うげに。）何でえ。

おとしの聲。さつき兄さんが留守のうちにね、お向ふの延美津さんの家で大騷ぎがあつたんだよ。

句樂。（急に顏を上げて。）さうか。如何したのよ。（氣配はしげに。）ええ、

おとし。一體その騷ぎつて云ふのは如何したのよ。

（おとし下手の障子を開きて出づ。三十四歳。女郎上りの女。殆んど絶間なく悲しげなる表情のみすれども、時々嘲ける如く笑ふことあり。粹纏。前垂。）

おとし。（句樂の前に坐りて。）　さうさね。兄さんが出て往つてから問もなくのことなんだよ。家の前を變な田舎者らしい男がうろうろしてゐたが、延美津さんの聲をじつと聽いてゐるやうな樣子なんだよ。さうだ。丁度煙草屋のお初つて娘が習つてゐる時だつたよ。私も變な奴だと思つてゐるうちに、そいつがいきなり格子を開けて延美津さんの家へ飛び込んで往つたものなのさ。

句樂。ふうん、何でえ、そいつは。

おとし。何だかいまだに分らないんだよ。何でも話の樣子では、延

美津さんが北海道で藝者をしてゐた時分に、世話にでもなつた男らしいのだが、それにしてもひどい姿をしてゐるのさ。きつと好い所の息子だつたのが零落てあんなになつたのだと私は思ふよ。

句樂。さうしてそれからどんな騒ぎがあつたんだ。

おとし。何だか知らないが、いきなり延美津さんを蹴倒しでもしたらしいのだね。家の中がまるで引つくり返るやうな騒ざなんだらう。私はもう延美津さんは殺されでもしたことと思つたの。（安火に手を温めつつ。）　ほんとに怖かつたよ。兄さん。

句樂。（熟心に。）　それから如何したのよ。

おとし。それからばつたり靜かになつてしまつたが、お初ちやんが

眞つ靑な顏をして出て來たから、如何したんだつて聽いたけれど、
默つてゐて如何しても話をしないのだよ。
句樂。しかしもうあやつて稽古をしてゐるぢやねえか。
おとし。ああ、自分ぢやあ何とも思つてゐないのかも知らない。
句樂。その男は如何したい。
おとし。何處かへ往つてしまつたやうだつたよ。さんざんいろんな
ことを云つてゐたやうだつたけれど——（句樂の顏を見て笑ふ。）厭だ
よ、兄さんは。お前延美津さんに惚れてゐるんだね。
句樂。（少し狼狽して。）笑談云つちやいけねえ。そんなこたあありやし
ねえよ。

おとし。（嘲ける如く笑ふ。）惚れてゐるなら取り持つて上げようか。
句樂。（眞面目に。）馬鹿あ云ふねえ。（間。）しかし、おとし、あの延美
津さんは死んだ紫君によく似てゐるぜ。
おとし。（氣味惡げに。）さうかい。
句樂。（悲しげに。）もう紫君が死んでから三年になるなあ。（稍狂しき調
子にて。）あいつの所へは三年も通つたんだ。煩ひ付いてたつた二
晩で死んぢまつたんだから、夢のやうな氣がするのも無理はねえ
だらう。しかし如何しても忘れられねえよ。今でもまだ生きてゐ
るやうな氣がして、ふらふらとして家を出懸けたくなることがあ
るからなあ。

おとし。（わざと戯れの如く。）兄さん。昔の情婦ののろけなんざあおよしよ。

（三味線の音止む。おぎん正面の路次より出づ。十七八歳位の美しき小間使風の女。手に風呂敷包を持つ。逡巡して佇みゐる。）

句樂。（寒さうに身顫ひをして。）三味線の音が止むと急にひつそりしてしまひやがるな。如何もくさくさして氣が滅入つていけねえ。おとし、まだ酒を飲んぢやいけねえかな。

おとし。いけないよ。また病氣が起ると大變ぢやないか。それにお錢だつてありやしないよ。

句樂。さうよなあ。席を休んでから半月になるからなあ。病院を出

てから十日つきや稼がねえ。

（句樂は安火に寄り懸りて考へ込む。延美津の家より近所の娘出で來る。）

おぎん。（その娘に。）句樂さんて人のお宅はこのご近所でございますか。

近所の娘。（不思議さうにおぎんを見て。）句樂つて落語家でせう。

おぎん。えゝ。さうですよ。

近所の娘。それぢやあそこの家ですよ。（句樂の家を指す。）

おぎん。ああ、さうですか、如何も有難う。

（近所の娘は正面の路次へ入る。おぎんは句樂の家の前に立つ。）

おぎん。ご免下さいまし。

おとし。（聽き付けて。）どなた——（立ちて障子を開く。）

おぎん。（極り悪げに。）あの——この手紙を持つてまゐりましたが

——（手紙をおとしに渡す。）

おとし。手紙を——あなたはどなたで——

句樂。何でえ。手紙か早く見せろよ。（おとしより手紙を受取りて。）何だ。

山崎さんの若旦那からなんぢやねえか。（開さて讀む。）

おとし。（おぎんに。）まあ、どうぞお入りなさいましよ。

おぎん。（ためらひて。）ええ——

句樂。（快活に笑ふ。）こいつあ洒落れてゐらあ。（おぎんに。）さあ、どうぞこちらへお上んなさい。（おとしに。）おい、おとし。ぼんやり

立つてゐずに、何とか言つて上げねえな。

おぎん。いいえ。もう私はここで澤山でございます。

句樂。笑談云つちやあいけねえ。この寒空にそんなところに何時まで立つてゐられるものぢやあねえ。

おとし。さあ、どうぞこつちへお上んなさいましよ。

（おぎんは家の中に入りて座敷の片隅に坐る。句樂は喜ばしげにおぎんの姿を眺む。）

句樂。（半はおぎんに、半は獨語の如く。）さぞ嬉しいだらうなあ。おれも昔こんなことがあつたが、今でも時々思ひ出すよ。やつぱりこんな雪もよひの日だつけ——家を逃げ出して、女と一所に長崎三界ま

で往つたのだが――あれから二人でずゐぶん苦勞でしたつけな
あ。
おとし。兄さん。何を云つてゐるんだね。
句樂。おれはこんなことに出會はすと嬉しくつて堪らねえのだ。
おとし。（訝しげに。）こんなことつて――
句樂。うん、お前にはまだ話さなかつたが、若旦那から女と二人何
處かに匿まつて置いて呉れつてお賴みなのよ。好い氣持ぢやねえ
か。惚れた若い者同志を見てゐると、おれはもう堪らなく嬉しく
なるね。なあ、おとし。何處かに二階でも貸す家はねえかな。
おとし。だつてそんなことがお宅へ知れたら大變だらう。

句樂。なあに關ふものかな。惚れた同志で一所になるのに何も不思
議なことあねえぢやねえか。何處かこの近所を聽いて見て呉れね
えか。
おとし。ああ。
（おとしは不性無性に勝手より出てゆく。殆んど同時に延美津出で來る。三十
歳位。凄艷な女。頰に傷痕あり。二人顏を見合はせて挨拶す。）
延美津。如何も先き程は――あんな馬鹿がやつて來たものですか
ら。
おとし。それでも怪我なんぞしなくつて好かつたわね。何處へ往く
の。

延美津。聖天様へお詣りに往かうと思つてゐるの。そこまで一所に往きませう。

おとし。聖天様ならこつちの方が近いでせう。

（雪降り出づ。）

延美津。おや、到頭降り出して來た。

おとし。そんなにひどいことはないだらうけれど——兎に角傘がなくつちややりきれない。

（二人は傘を取りに家に戻り、何ごとか呟き合ひながら下手の路次へ入る。句樂は耳をそばだてて延美津の聲の聽えずなると同時に二度悲しげに考へ込む。）

おぎん。（心配さうに。）もういらつしやりさうなものですがねえ。

句樂。何も心配しなさることはありませんよ。もうぢきおゐでになるでせう。（感傷的になつて。）何もそんなに心細がらなくつても好いやね。そりやあさうやつて一人で待つてゐる間と云ふものは、ずゐぶん情ないやうな氣がするだらうが、それがまた樂しみなものさ。おれのやうな年になつちやあもうそんな心持になれやしねえ。たとへ惚れた女があつてものことだ。昔の女に似てゐるとか何とか云つて、やつぱり昔の夢を繰り返へさうとするのが、せめてもの樂しみなのだからなあ。

おぎん。（何の氣なしに。）昔の夢つてどんな夢——

句樂。（この言葉を聽いて喜ばしげに。）そんなことを聽いて呉れるやつは、

今日まで一人だつてありやあしねえ。おれは嬉しいよ、おぎんさん。ほんとに、嬉しい——耐らなく嬉しいや。（涙をこぼして。）お前さんはおれの昔の夢の話を聽いて呉れるかい。

おぎん。ええ、聽くわ。話して下さいな。（急に驚いて。）まあ、泣いてゐるのね。

句樂。（突然笑ひ出して。）ははは、昔の夢はどんな夢か。しかし待てよ。よく思ひ出さなくつちや分らねえぞ。（沈默して考へ込む。）さうだ。やつぱり始めは藥研堀の質屋の妾が殺された晩のことからだな。

おぎん。（氣味惡げに。）何なの、一體その話。

句樂。まあ默つて聽いてゐねえ。（怖ろしげに。）因緣と云ふものは怖ろしいものだぜ。その妾つて云ふのが、おれの眞實のおつ母さんで、おれが十四の時に殺されてしまつたんだが、それにもう一人娘があつて、それが後で鳥追お松になるのよ。（考へて。）少し變だな。いけねえ、いけねえ。さうぢやねえ。何だ、それ——紫君つて華魁がまだ店へ出たばつかりのことなんだ。

（句樂は最後の言葉を云ひ終りてより、ぼんやり何處ともなく凝視しゐる。沈默。おぎんは驚きて句樂の顏を見る。）

おぎん。もう好いわ、昔の夢の話は。

句樂。（悲しげに。）もう昔の夢の話も忘れてしまつたよ。やつぱり山

崎の若旦那位の時分だらう。もうかれこれ三十年も前のことだらうなあ。おれは今までに駈落を三度したが、忘れられねえのはその中の一度だけだな、それが昔の夢の話なんだが、今日はもう話すのは止さうよ。聽いて呉れるのは嬉しいが、如何もまだすつかり思ひ出されなくつていけねえ。まだからだが惡いのかなあ。おぎん。闌はないから横になつてお寢みなさいよ。

句樂。なあに寢るにも及ばねえよ。

（新太郎正面の路次より出づ。二十三四歳位の青年。目金を懸く。外套を着中折を被りゐる。句樂の家の前に來る。）

新太郎。（格子戸を無造作に開きて。）句樂さんお家かい。

句樂。若旦那ですか。さあ、お上んなさい。さつきからお待ち兼ねですせ。

新太郎。（座敷に上る。）如何も飛んだことを頼んぢやつて——

句樂。なあに飛んだことどころか——早速おとしを捜しにやりましたが。二階か何かの方が好いだらうと思つて、さう云ふことにして置きましたせ。

新太郎。（坐る。）そりやあ如何も有難う。（寂しげな調子。）しかしね。句樂さん。かうなつて見ると、おれも到頭君達のお仲間入りをしたやうな氣がして、何だか寂しいやうな心持もするよ。

句樂。（新太郎の言葉の意味がよく分らずに。）私達の仲間つて——

新太郎。世間から見離された人達さ。さうしてまたこつちから世間を見離した人達さ。

句樂。（笑って。）私なんぞはもつとひでえや。世間なんてまるでねえもんと思つてゐるんだからね。結句その方が幸福さね。

新太郎。お前でも幸福なんてことを考へるかい。

句樂　そりやあ考へまさあね。だがね、若旦那。幸福なんてものは惡い酒のやうなものですぜ。醉つてゐる間は好い心持だが、覺めた後ぢやあきつと頭が痛みまさあ。

（二人は笑ふ。雪は次第に烈しくなる。）

新太郎。句樂さん。今日はまるで酒の氣がなささうだね。

句樂。ええ。飲みてえんですが、席を休んでゐるものですから——

新太郎。おい、おぎん。ちよつと酒を買つて來て呉れないか。（おぎんに金を渡す。）

おぎん。酒屋は何處にあるんでせう。

句樂。なあにもうおとしが歸つて來ますからあいつを使ひにやりませうよ。

おぎん。いいえ、私が往つて來ますからよござんすよ。

句樂。さうですか。そいつは恐れ入りますな。酒屋はこの路次を出ると直ぐ向ふ側ですよ。

新太郎。（おぎんに。）おれの傘がそこにあるよ。

（おぎんは下手の路次へ入る。）

新太郎。句樂さん。何時だかお前の云つてゐた通り、到頭家を飛び出すことになつてしまつたよ。

句樂。いや、全く好いことをしましたよ。若いうちに一度位家を飛び出さないやうな男は駄目ですよ。家を飛び出してご覽なさい。これからはあなたの自由ぢやありませんか。しかしお宅ぢやさぞ驚いておいでせうな。

新太郎。さうでもあるまいよ。結局好いことにしてゐるかも知れない。（句樂の顔を凝視す。）句樂さん。一體お前のあの病氣は、もうすつかり快くなつたのかい。

句樂。（ぎつくりして。）ええ、もう、大抵快くなつたと思ひますがね。しかし時々頭の中に泥が一杯詰まつてゐるやうな心持のすることがありますよ。

新太郎。何時だつけかなあ、あの病氣が起つたのは。

句樂。さうさね。去年の春時分から餘つ程怪しかつたのだが、ほんとに惡くなつたのは八月の末でしたかな。丁度その時は若竹に出てゐて、それから兩國の立花へ廻らなけりやあならなかつたのでしたが、電車に乘つてゆく途中で——さうさ、須田町を出て間もなくのことでしたよ——ふいと私の隣を見ると、死んだと思つた紫君が腰を懸けてゐるぢやありませんか。（急に話を止めて。）この話

はもうあなたには話してしまひましたかね。

新太郎。いいえ、まだ聽かないよ。紫君の話だけは聽いたけれど——

句樂。それぢやあまあ聽いて下さいまし。（殆んど呼吸も吐かずに話す。）

それでもうその時は餘っ程如何かしてゐたのですね。紫君が死んだつてことは氣が付きません。會つたのが嬉しくつて、お前は何處へ往くんだつて云ふと、あなたの後を追っ懸けて來たつて云ふんでせう。それなら電車の中で話も出來ねえから、何處かで酒でも飲みながら話さうと云ふので、淺草橋あたりで電車を降りたとお思ひなせえ。誰もゐやしねえんだが、こつちは女と一所に歩いてゐる氣ですから、句樂だつて情婦を連れて歩くことはあらあつ

て顔付をして、如何でえ久しく會はなかつたな、病氣だつて話だがもうすつかり快いのかなんて云ひながら、何でも廣小路の近所の鳥屋へ上つたんですよ。さうして酒を飲まうとすると杯が一つしかない。姉さんお客は二人だせつて言ふと、ご笑談をつて云つたきりまるで相手にしませんや。仕方がねえから一つの杯を遣り取りして——その實一人で飲んでゐるんですが——いろんなことを話してゐる。これだつて一人で何か饒舌つてゐたんですね。もうかうなると女中も何も出て來やしません。そいつがね、今考へて見てもをかしいのは、私の前に坐つてゐる紫君の姿つてものが、すつかり華魁の姿をしてゐるんでせう。頭を紫天神か何かに結つ

て、襠襠を着てゐるんだから面白いやね。

新太郎。つまりそんな幻が見えたんだね。

句樂。（眞面目に。）いいえ。幻ぢやあねえんです。たしかにそこにゐたんですからな。それから家へ歸つて來てふいと傍を見ると今までゐたと思つた紫君の姿が見えねえんでせう。私はその時程がつかりしたことはありませんね。それから家を飛び出して、吉原へ往つて見るともう大引け過ぎです。寶來屋を敲き起して紫君に會はせろつて云つて聽かなかつたさうですが、何時の間にか酒に醉つぱらつて寢てしまつたものと見えますね。目を覺ますともう曉の光が欄間の所へ差してゐて、名代部屋にたつた一人で寢てゐる

んです。咽喉が乾いてゐたので水を呑まうと思つて、枕元に置いてあつた水差に手を懸けやうとすると——如何です、そいつが口をきくぢやありませんか。

新太郎。大分怪談話になつて來たね。

句樂。句樂さん、あんまりお酒を飲むのはおよしよ。毒だよつてその水差が云ふのですよ。さうしてその聲がやつぱり紫君の聲なんです。何だかその聲を聽くと急に悲しくなつて來て、涙がぽろぽろこぼれてまるで留め度がねえんです。さうしてしまひには聲を立てて泣き出しました。驚いたのはここへ入つて來た華魁さね。私はみんなが留めるのも聽かずに外へ飛び出してしまつたが、さ

て何處へ往くと云ふ當もねえんでせう。そのうちやつて來たのが代地河岸なんです。柳橋を渡らうとするとまるで黑山のやうな人でさあ。何だつて傍の人に聽いて見ると、華魁の身投げだつて云ふんです。さうするとそこでひよつくり出會つたのが先代の談州樓燕枝さ。これが私の耳の傍へ口を寄せて、驚いちやいけねえ、紫君が身を投げたんだぜつて云ふんでせう。私は思はず人を搔き分けて前の方へ出て往きましたね。さうするとこれがまたをかしいやね。そこに並んでゐるのがみんな社祢を着たお役人ばかりなんでさあ。傍にゐる人達が私をつかまへて、うつかりあすこに往つちあいけねえ、あすこにゐるのは幽靈のお役人ばかりなんだか

らつて云つたんですが、そんなことに關つてはゐられませんや。いきなり飛び出して往つて紫君の死骸に縋り付いて、おいおい聲を立てて泣いたもんです。それから後はまるで夢中でさあ、田端の氣狂ひ病院にゐる間紫君のことばかり云ひ續けてゐたんださうですよ。

新太郎。僕の一番始めに往つた時なんぞは、かなりひどかつたね。すつかり白井左近になつてゐて人相を見てやるつて云つて困つたせ。

句樂。（笑ふ。）ははは、さうでしたかな。もう大丈夫です。

（おぎんが手の路次より出づ。家の中に入る。雪やや積る。）

おぎん。如何もおそくなりました。（臺所に往きて。）おや、まるで火種がありませんね。

句樂。お酣を付けて下さるんですか。恐れ入りますな。（安火を押し遣りて。）ここに火種がありますよ。

おぎん。（安火を臺所に運ぶ。）まあ哀れな火種だこと——

句樂。（おぎんの後姿を見送りて。）若旦那。可哀がつておやんなさいよ。あんなおとなしい子は今時あんまりありませんよ。

新太郎。（笑つて。）馬鹿あ云つてる。（間。）おとしさんは如何したんだい。大變おそいやうだね。

句樂。さうさね。あん畜生、何をしてゐやがるのか。しかしもう歸

つて來ませうよ。（上手の障子を開きて。）やあ、雪が大分積りましたせ。

（沈默。雪の降る音微かに聽ゆ。）

新太郎。靜かだねえ。

句樂。（溜息を吐く。）ええ、こんな時は如何も氣が滅入つていけねえ。

新太郎。それにさつきの話で、また紫君のことでも思ひ出したのぢやないかい。

句樂。（悲しげに笑つて。）ええ、すつかり思ひ出してしまひましたよ。始めて會つたのが丁度こんな雪の降る日でね。お客に連れられて晝遊に往つたのが病み付きさ。（おぎんに。）まだお酣は付きません

かね。

おぎんの聲。まだ少し温いかも知れないけれど——

（おぎんは膳と徳利とを持つて出づ。）

句樂。（喜ばしげに。）そりやあ難有てえ。久しぶりの酒だ。（杯を新太郎に差す。）さあ、まあ若旦那一杯。

（新太郎の杯におぎんは酒をつぐ。）

新太郎。（おぎんに。）おい、句樂さんにお酌をしておやりよ。

おぎん。えゝ。（杯を句樂に差して酒をつぐ。）

句樂。（酒を飲みて。）難有てえ。何だか昔の夢を見て居るやうな氣がしますよ。（突然杯を置きて。）いけねえ、いけねえ、昔の夢なんてこ

とを考へると——（戰慄して。）それ、またあの病院へ——あの眞つ青な病院へ往かなくちやならねえ。

新太郎。（黙さて。）如何したんだい、句樂さん。

句樂。いいえ、何でもねえんです。（猶異樣なる調子。）若い時分にね。私が女と驅落をして長崎へ往つたことがあるんですよ。その時私もずゐぶん惡いことをした盛りでしたからね。女を稻佐の女郎に敲き賣つて、その金を旅費にして東京へ歸つて來たんでさあ。それがあなた不思議ぢやありませんか。あの田端の病院が稻佐のその女を賣つた家にそつくりなんですよ。（間。）さうさうさつきおぎんさんに昔の夢の話をしようと思つたが、如何しても思ひ出さ

れねえで止めちまつたのでしたよ。（おぎんに。）やつと思ひ出すことは思ひ出したが、今度は何だか話すのが怖くつて仕方がねえ。おぎん。（二度恐怖の表情を示して。）もう好いわ。さあ、お酌をしませうね。

句樂。（杯を取り上げて。）これは如何も濟みません。（新太郎に。）醫者からは酒を飲むなつて云はれてゐるんですが、如何もこればかりは止められませんや。しかし退院して二月やらなかつたのですからね。もうやつても好いでせう。

新太郎。しかしあんまり飲まない方が好いせ。

句樂。ええ。前見てえにはやりませんよ。

（おとし正面の路次より出づ。直ちに家の中へ入る。）

おとし。（新太郎に。）おや、若旦那。お出でなさいまし。（句樂に。）兄さん、お酒を飲んでゐるね。お醫者にあれ程止められてゐる癖に。

句樂。何云つてやがるんだえ。關ふもんか。惡くなりやあ惡くなつた時よ。

新太郎。（困りて。）おれが酒を買ひにやつたんだが。惡いことをしたね。

句樂。なあに大丈夫ですよ。何もご心配なさるにや及びませんや。

（おとしに。）まあ、そんなことよりも肝腎の二階は如何したんだ。

おとし。方々搜したんだが、中々好い所がないんだよ。おはつちや

んの所の二階がまあ一番好ささうだから、あすこに極めてきたんだよ。

新太郎。何處だつて好いよ。それぢやあ早く往かうぢやないか。

句樂。まあ、もう少しお待ちなさい。この酒を飲んでしまふまで。

おとし。そんなに飲んで如何する氣だい。若旦那と一所に往つておいでよ。

新太郎。（おぎんに。）おい、その二階に往つて見ようよ。

おぎん。ええ。

おとし。（句樂に。）兄さん。知つてゐるだらう。あの呉服屋の隣の煙草屋さ。

句樂。うん。それぢあちょつと往つて來るかな。

おぎん。（おとしに。）如何も御邪魔をいたしました。

おとし。如何いたしまして——

（新太郎。おぎん。句樂の三人は正面の路次へ入る。おとしは膳など片附け終りたる後、細目に障子を開きて外の雪を眺む。稍長き間。延美津。下手の路次より出づ。句樂の家の前に立ち留る。）

延美津。おとしさん。ひどい雪になつてしまつたね。

おとし。今お歸り——大層おそかつたんですね。

延美津。ええ、廻り道をしてゐたもんだからこんなにおそくなつてしまつて——句樂さんは——

おとし。今ちよつとそこまで――まあ、お上んなさいよ。たつた一人つきりなんだから。

延美津。さう――それぢやあちよつとお邪魔をしてゆかうかね。

（延美津は句樂の家の中へ入る。二人は向ひ合ひて坐る。）

おとし。何だかこの雪はなかなか止みさうもないわね。

延美津。ええ、この分ぢや大分積りさうですよ。句樂さんはまだ席を休んでゐるの。

おとし。病氣をしてからすつかり怠け癖が付いてしまつてね。ほんとにあんまり長く休んでゐると困つてしまふのだけれど――それでも藝人は難有いことには、いろいろ世話をして下さる方があ

るものだから、まあやつと如何にかしてゆけるのさ。

延美津。しかし藝人は女では仕方がないね。苦勞が多いばかりなんだもの。ほんとに今朝のやうなあんな騷ぎにも幾度出つ會したか知れやしない。考へて見ると女は全くつまらないねえ、おとし。あなたがそんなことを云つてゐたら私なんぞ何て云つたら好いだらう。女郎上りの女なんてものは、まるで羽の取れた蟋蟀見たやうなものだからね。今更泣かうつたつて泣くことも出來やしない。

延美津。そんなにくよくよしてゐちやあつまらないぢやないか。この世に生れた甲斐には面白をかしく暮らした方が眞實だと思はれ

るのだがね。私は今までに幾度今朝見たいに男から打たれたりしたか知れやしないよ。ご覽よ。この傷痕を――これはね、忘れもしない二十三の時さ。まだ銚子で藝者をしてゐた時分に、心中をしそこなつたお名殘なのだよ。

おとし。まあ、男は如何しちまつたのだい。

延美津。男は死んぢまつたのさ。（間。）あゝ、雲が降ると北海道のことが思ひ出されるよ。二十四の年から七年ゐたんだからねえ。そりやあずゐぶん嬉しいことや悲しいことがあつたのだよ。そのなかでも私たつたひとつ忘れられないことがあるの。

おとし。やつぱり男のことでなの。

延美津。ああ、勿論さ。しかしひとが聽くとつまらないかも知れないよ。

おとし。あゝ好いからお話しよ。

延美津。聽いて呉れるなら話すけれど――（うつとり障子を見る。）さうさね。何處から話したら好いだらう。兎に角私が北海道を方々流れ渡つた末、二度目に札幌に舞ひ戻つた時のことなのだよ。丁度家の隣が宿屋になつてゐて、そこには東京の役者に附いて來たお囃子の連中が泊つてゐたのさ。こつちも藝者のことだし直ぐ往來をするやうになつてしまつたのだが、そのお囃子のなかに、一人笛を勤めてゐる十七八の若い男がゐたのだよ。別段深くなつてゐ

た仲と云ふ譯ではなかつたけれど、もうその一座がそこを立つて東京へ歸ると云ふ晩に、私は何だかその人と別れるのが悲しくなつて、芝居の閉ねるのを待つて呼び出したものさ。もう春にはなつてゐたけれども、まだ路傍には雪が殘つてゐて、月の光だつて冷たく冴えてゐるのだ。そりや今思ひ出してもその晩の景色がはつきり目に浮んで來るやうだね。樂屋口から出て來たその人の手を引いて話し合ひながらぶらぶら歩いて往くうちに、何時の間にか私達は街の外へ出てしまつたのさ。（言葉を止めて回想に耽る。）

おとし。それから如何したの。

延美津。もうゆつくり話しちやゐられないから急いで話すよ。（間。）

それからその人が笛を吹いたの。さうして私がその傍で泣いたの。その人もしまひには笛を吹きながら泣いてゐるのさ。笛の音が顫へて、しまひにはもう吹けなくなつてしまつたのだよ。（目に涙み浮べなら笑つて。）もう止さうね。こんな話は。ひとが聽いたらつまらない話に極つてゐるから——

おとし。それつきりその人には會はなかつたのかい。

延美津。時時會ひたいと思ふけれど——もうかうなつちやあ會つても吳れないよ。

（句樂正面の路次より出づ。醉ひて蹌踉として歩む。傘なし。）

句樂。（怒鳴る）。なに、句樂の氣狂ひだと——馬鹿——何が氣狂ひだ。

（空虚なる聲にて笑ふ。）ははは、世間の奴等はみんな氣狂ひなんだ。そいつらが。何を云やがるんだ。おれは小猿七之助よ——それが仇討が怖いので俳諧亭句樂になつたのよ。如何でえ。分つたか。

（おとしはその聲を聽き、疑ふ如く耳を傾く。句樂は讀きて烈しく格子戸に突き當る。）

句樂。べらぼうめ。おれの云ふことはみんな嘘だなんて、誰がそんなことを云やがるんだ。畜生。さあ承知しねえぞ。出て來い。

（句樂はまた正面の路次の方へ歩む。おとしは外へ飛び出して引き留む。）

おとし。如何したんだね。こんなにお酒に醉つぱらつて——

句樂。嬉しいぢやねえか。惚れた同志が一所になる。こんな嬉しい

ことあねえぢやねえか。そこで飲んだのよ。若旦那から一兩貰つて、今そこの酒屋ですつかり飲んぢまつたんだ。

おとし。さあ、そんなことは如何でも好いから。早く家の中へお入りよ。着物もすつかり濡れてゐるよ。

句樂。（急に聲を潜めて。）お前が鳥追お松だつてことは、誰にも知らせちやいけねえぞ。

おとし。（悲しげに句樂の顏を見る。）お醫者があれ程飲んぢやいけないつて云つたお酒をお前は到頭飲んぢまつたんだねえ。

句樂。（猶聲を潜めて。）好いかい。もしお前が鳥追お松だつてことが知れると大變だぞ。

おとし。ああ好いよ。分つたよ。さあ、家へお入りよ。

（句樂は家の中へ入らむとして、驚きて外を覗きゐたる延美津と顔を見合はす。）

句樂。（叫ぶ。）おお、お前は紫君ぢやねえか。（座敷へ上りて。）ほんとに久しく會はなかつたなあ。

おとし。さうぢやないよ。お向ふの延美津さんぢやないか。

句樂。笑談云ふねえ。延美津さんはさつき聖天樣へ往くつて出懸けたぢやねえか。（延美津に。）さあ、紫君、久しぶりで何處かへ往つて一杯やらう。

延美津。（小聲にておとしに。）また病氣が起つたらしいね。

おとし。（悲しげに。）如何したら好いだらうねえ。

句樂。（延美津に。）さあ、愚圖々々しずに支度しねえな。お前に始めて會つたのも、やつぱりこんなに雪の降る日だつたぢやねえか。

（おとしに。）さあ、おとし、お前も早く逃げなくちやいけねえ。うつかりしてゐるやつがあるのに違えねえのだ。だからな——それさつ覗つてゐるやつがあるのに仇討に會ふぜ。如何もこの間からおれ達を附けき云つて置いた通りに、素性を隱してゐなくつちやいけねえぞ。おりやあ關はねえさ。おれが小猿七之助だつてことは誰でも知つてゐらあな。しかしお前が烏追お松だつてことは誰も知らねえ。知れたらそれこそ大變だ。それ——講釋師の典凌つてやつ——あいつが如何も怪しいんだぜ藥研堀の一件もたしかにあいつに違え

ねえのだが――

おとし。（悲しげに頷く。）分つたよ。分つたよ。

（延美津立ち上りて歸らむとするを、句樂慌ただしくその前に立ち塞がる。）

句樂。（延美津の手を取る。）何處へ往くんだ。待ちねえよ。今一所に往くから――何か溫けえもんで一杯やらうぢやねえか。（延美津當惑して佇む。）なあ、紫君。典凌のやつはお前にも惚れてゐたんだな。あいつの煙草入を質に入れて、お前の所へ通つたこともあつたが――あの煙草入の金具は好い彫だつたぜ。嬲の面よ、誰が彫つたんだか知らねえが、細い生々として好い彫だつた。如何もあれが祟つてゐるんだな。あれからだぜ。お前はどつと煩ひ付く。おれ

は博奕で滅茶滅茶に負けてしまふ。（急に笑ひ出して。）ははは、べらぼうめ。おれは氣なんど狂つてやしねえぞ。世間の奴等はみんな氣が狂つてゐるんだ。第一世間の奴等はみんな嘘吐きだ。どいつもこいつも嘘ばかり吐きやがる。さうして眞實のことはひとつも知らねえ。早い話が眞實に女に惚れるやつだつてありやしねえぢやねえか。

延美津。さあ、この手を離してお呉れな。ねえ、句樂さん。何處へでもお前の往く所へ一所に往くから――

句樂。さうか。（ぢつと延美津の顏を見る。）紫君、お前だけは一度も嘘を吐かなかつたな。（手を離して。）しかし女はなほさらさうだ。おれ

に今まで會つた女はみな嘘吐きだつた。女位眞實のことを云はねえものはありやあしねえ。

おとし。兄さん。まあ、坐つたら好いぢやないか。

句樂。しかしおれはこれから紫君と一所に何處かに往くんだから、坐つたりなんかしてゐる暇はねえよ。

延美津。句樂さん、もう何處かへ往くのは止して、家で飲まうよ。

おとし。ああ、それが好い、それが好い。ねえ、兄さん。さうおしよ。

句樂。それなら家で飲んでも好いが——（坐る。）家ぢやあうまくねえからな。（急に何ごとかに氣付きて。）さうだ。すつかり忘れてゐた。（部

屋の隅を見て。）あすこだ——あすこだ——

（句樂は一心に祈禱す。おとしは延美津に目にて知らす。延美津そつと立ちて壁所より拔け出しその家へ入る。）

おとし。兄さん。もうお寢みな。

（雪止みて、急に薄日差し來る。一人の近所の娘下手の路次より出で延美津の家に入る。）

おとし。（句樂の肩に手を懸けて。）兄さん。

句樂。（怒りて。）何でえ、うるせえな。今不動樣を拜んでゐるところぢやねえか。おれにはちやんと不動明王のお姿が見えてゐるんだが、お前には見えねえだらう。（部屋の一隅を指差して。）それ、そこ

よ、難有てえ。難有てえ。お前も不動様を信心しなくつちやいけねえぞ。さあ、拜め。おれと一所に――拜まねえとぶん毆るぞ。

（立ち上りておとしに打ち懸らむとす。）

おとし。何をするんだね。拜むよ。さあ、兄さんもお坐りよ。

句樂。（座りて。）うん。よし、よし。（同じ部屋の一隅を指差して。）見ろ。難有てえお姿ちやねえか。まるで成田屋のやつた不動様見てえだなあ。（聲色を使ふ。）わが大明王大威力は五智の中央にして大日如來の化來なり、一切衆生を度せんがために、面に憤怒の相を現はし、智慧の利劍を以て煩惱の賊を斷ち――（身振をしつつ。）好かつたせ、ほんとに――

（延美津の家より再び三味線の音聽え始む。句樂は急に沈默して考へ込む。稍長き間。）

おとし。如何したんだい、兄さん。

句樂。如何もおれにも分らねえことがあるんだが――

おとし。何さ。

句樂。今こゝに紫君がゐやしなかつたかい。

おとし。笑談云つちやあいけないよ。紫君さんは死んぢまつたんぢやないか。

句樂。（急に怒りて。）馬鹿あ云ふねえ。紫君が死んで堪るものか。おれの生きてゐる間は、紫君も生きてゐるに違えねえんだ。もう一

度紫君が死んだなんて云つて見ろ。このままぢやあ置かねえぞ。

（疑はしげにおとしを見て。）何だな。お前は紫君を何處かへ隱しやがつたのだな。（激して。）畜生。さあ、紫君を何處へ隱したんだ。早く出さねえか。早く出せ——早く出せ——出さねえと承知しねえぞ。

おとし。今會はせるから靜かにしておゐでよ。

句樂。何でえ。そんなことを云つて胡魔化さうつたつて、おれはちやんと知つてゐるんだ。不動樣がちやんと敎へて下さらあな。紫君は何處にゐますかつて聽きさへすりやあ、きつと何處にゐることを知らせて下さるんだ。

（句樂は二度部屋の一隅に向ひて祈禱す。沈默。夕日の光寂しく障子に映り來る。）

句樂。（突然起き上りて笑ひ出す。）分つた。分つた。よし、さあ、おれはこれから紫君の所へ往つて來る。（急に悲しげに。）可哀想に紫君は、眞つ暗な牢屋のなかにゐるんだぜ。その牢屋のなかには一年中日の光が差したこたあねえんだ。（間。）だがあの牢屋の鍵は誰が持つてゐるだらう。あの牢屋のなかにはおぎんさんもゐるんだから——さうだ、若旦那が鍵を持つてゐるに違えねえ。

（句樂は突然跣足のまま外へ飛び出す。）

おとし。（後を追ひて。）兄さん——兄さん——

（句樂は正面の路次へ走り入る。おとしも後を追うて家より走り出づ。路次の前

に立ち留りて急に烈しく泣き始む。延美津の家の三味線の音突然止む。幕。）

第二幕

同じく淺草馬道の煙草屋の二階。六疊と四疊半の二間。
上手は六疊の間の戸棚と壁。正面は窓。障子を閉め切る。下手の四疊半の間と襖にて隔つ。下手に窓。同じく障子を閉め切る。階子段は下手にあり。すべてこの階子段より出入す。壁に外套と中折を懸く。正面の窓の下に粗末なる机一個。その上に洋燈を置く。火鉢には藥罐を懸けあり。
午後五時頃。外はまだ明るけれども、部屋のなかは薄暗くなりゐる。
（新太郎とおぎんとは火鉢に向ひ合ひ坐りゐる。）

おぎん。（洋燈を氣にして。）何だか厭に暗うございますね。（捩子を動かす）

まあ、急に明るくなりましたわ。

新太郎。明日好い洋燈を買はうよ。いろいろ買ひ物があるね。

おぎん。ええ。（鬱ぎ込む。）

新太郎。如何したんだい。また何か考へてゐるのだね。

おぎん。それでも何だかあなたに濟まないやうな氣がしまして——

新太郎。何だい。まだそんなことを云つてゐるのかい。馬鹿だなあ。もうそんなことを云ふのはおよしよ。水臭いぢやないか。

おぎん。今頃お宅ぢやきつと驚いていらつしやいますよ。

新太郎。しかし樫村が家へ往つてよく話して呉れるさうだから、そんなに驚きもしやしまいよ。樫村はもうぢきこつちへやつて來る

だらう。

おぎん。ここの家がお分りになりませうか。

新太郎。何樂の家で聽くから分るよ。しかしあいつもきつと驚くぜ。煙草屋の二階とは氣が付かないだらうからなあ。

おぎん。（笑つて。）ええ。

新太郎。（ぢつとおぎんの顏を見て。）お前はかうやつてゐるのが嬉しくはないかい。

おぎん。嬉しくないなんて——そんな——（直ぐ涙ぐむ。）私はあんまり嬉しいので何だか夢のやうな氣がいたしますわ。しかし何時までかうやつてゐられますか——先きのことなんぞ考へると心細

くつて仕方がございません。（涙をこぼす。）

新太郎。もうそんなくだらないことを考へるのはおよし——さあ、涙をお拭き——（手巾を渡す。）ここの家の人でも上つて來ると見つともないからね。

おぎん。（涙を拭ふ。）ええ。

新太郎。（堪へがたき樣子にて。）さあ、ここは二人の世界なんだよ、もつとこつちへお寄りよ。（おぎんの手を取る。）如何したんだい。冷たい手をしてゐるぢやないか。

おぎん。だつて雪の降るやうな寒さなんですもの——

新太郎。（おぎんの顏を見ながら。）何だかお前は今日頼なささうな顏をし

てゐるねえ。

おぎん。さうですか。しかし何でもないんでございますよ。

新太郎。ほんとにあんまりそんなことを考へるのはおよしよ。

おぎん。（伏目になりて。）女でございますもの――仕方がございませんわ。（新太郎が興奮して接吻せんとするを避けて。）まあ――

新太郎。如何して――

おぎん。（耻しさうに。）あんまりだしぬけなんでございますもの――びつくりいたしますわ。

（二人は徐に接吻す。稍長き間。突然階子段の下にて騒がしき物音起る。二人は驚きて離る。）

句樂の聲。（階子段の下にて。）若旦那――若旦那――

新太郎。誰だい。句樂さんかい。お上りよ。

（句樂は階子段を昇りて出づ。着物は泥に塗れ、足には傷など付きゐる。殆ど人が變れる如く狂暴の表情となりゐる。續いて煙草屋の女房と娘現はれ階子段の上に佇みゐる。）

句樂。（立ちたるまま。）若旦那。あなたが鍵を持つてゐるんでせう。

新太郎。（驚いて。）鍵なんぞ持つてゐやあしないよ。如何したんだい。

句樂さん。着物が泥だらけだぜ。

女房。跣足で上り込んで來たんですよ。

句樂。（新太郎に。）なに、持つてゐねえ。そんなことはねえ筈だ。牢

屋の鍵ですせ。それ傳馬町の大牢の鍵さ。紫君があすこに入つてゐるのですよ。何の罪咎もねえのに可哀想ぢやありませんか。ねえ、若旦那。隱さずに鍵を出しておくんなさいな。

新大郎。ほんとに僕はそんな鍵なんぞ持つてやしないよ。

句樂。それぢやあなたはまだ知らねえな。おぎんさんも紫君と一所にその牢屋のなかにゐるのですせ。

新太郎。（漸く句樂の狂へるに氣付く。）おぎんはここにゐるよ。

句樂。笑談云つちやいけねえ。そりやあ死んだ田之助の幽靈さ。

新太郎。（女房に。）また病氣が起つたのですね。

女房。さうでございますね。早く家へ知らせてやりませう。

お初。私往つて來ませう。おとしさんに知らせるのでせう。

（娘は階子段を降りて去る。句樂は坐りて沈默せるまま洋燈の燈を凝視す。）

おぎん。（小聲にて新太郎に。）如何しませう。怖いわね。

新太郎。大丈夫だよ。

女房。ほんとにこの前なんか大變でしたよ。今おとしさんが來るでせう。

（女房は階子段を降りて去る。障子の外も全く暗くなる。句樂突然立ち上りて叫ぶ。）

句樂。おお、あんなに大勢の跫足が聽える。畜生。到頭おれの居所を搜し出しやあがつたな。それで仇討に來やがつたのだらう。（急

にがつかりして。）いや、さうぢやねえ。跫音がまるで聽えねえやうになつてしまつたぢやねえか。べらぼうめ。おれには不動樣が附いていらつしやるんだぜ。いくら仇討に來たつて駄目なことよ。（考へて。）しかし何でおれは仇討に會ふんだらう。如何も分らねえぞ。（新太郎に。）ねえ。若旦那。あなたはその譯を知つてゐるだらう。

新太郎。分らないね、句樂さん。まあ坐つたら好いだらう。

句樂。（坐りて獨語す。）如何も分らねえ。嬲の煙草入を質に入れたことかな——さうぢやあねえ——何でも月が二つ出た晩のことだ。あの晩からこの仇討が始まるんだ。冬の直つ最中のことで、丁度私

はこの時金車へ出てゐたんだが、席を出てから何處かで一杯やらうと思つて、ひよいと空を見ると月が二つ出てゐやがる。私はその時考へたね。こりやあ世の中がだんだん惡くなつたからだなとかう思つたんでさ。全くですぜ。若旦那、今にご覽なさい、戰があるから——ええ、ありますとも。そりやあ大きな戰がある。大變ですぜ。貧乏人と金持との戰なんでさあ。私なんか貧乏人の方の大將になつて出懸けるんだが、こいつが馬鹿に强くてね。向ふ所敵なしつて有樣で、金持は塵殺しさ。（間。）しかし若旦那は一體どつちの方なんですね。

新太郎。（笑ひながら。）無論句樂さんの方の味方さ。

句樂。そいつは難有てえ。何しろ私は若けえ時から軍書を讀んでゐるから、戰のことには詳しいやね。（指を折りて數ふ。）三國誌、八犬傳、諺紫田舍源氏、伊勢物語、徒然草、よものあい、柳樽――こりやあみんな立派な軍書でさあ。さあ、そこで戰となるとこれがみんな役に立つて來る。私の姿を見ると金持の方ぢやあみんな逃げ出しまさあ。とても敵ひつこねえんだから、いくら金持だつて命は惜しいやね（急に語を止めて。）おや、私はこんな話をするつもりぢやなかつたんだが――さうだ。月の二つ出た晩の話だつけ。ぶらぶら傳法院の横をやつて來ると、ばつたり出會つたのが例の典凌つてやつさ。何處かで一所に飲まうつて云ふんで、二人で飲み

出したのは好いが、この晩はまた變な晩で、いくら飲んでも二人とも醉はねえんです。一體この典凌つてやつが惡いやつでね。こいつが私の戀敵なんでさあ。前から紫君に惚れてゐやがつたに違えねえんだが、その晩始めて紫君に惚れてゐるつてことを私に云やがつたんですよ。これが敵討の發端なんですがね。（急にまた思ひ出して。）こんな話どころぢやねえ。若旦那。鍵を出しておくんなさいな。紫君が牢屋の中で泣いてゐるんぢやありませんか。おぎん。如何してあんなに紫君つてひとのことばかり云ふんでせう。

新太郎。やつぱり忘れられないのだね。可哀想に――句樂さん。今

ぢきに鍵を搜してやるから待つておゐでよ。
おぎん。横にでもなつてゐたら好いでせう。
新太郎。さうしてゐるが好い。そのうちに鍵を搜して置くよ。
句樂。（荒々しく。）そんなことをしてゐられるものか。（部屋の一隅を見て。）ああ、不動樣がいらしつた。不動樣がいらしつた。紫君が如何してゐるかもう一度不動樣に聽いて見よう。
（句樂は祈禱す。稍長き間。）
おぎん。何を拜んでゐるのでせう。
新太郎。不動樣なんだよ。不動樣を信心してゐるんだらう。
（二人は句樂の祈禱せる姿を眺めゐる。）

句樂。（急に起き上りて。）若旦那。紫君が牢屋にゐるのは嘘だつたんですよ。あいつは山谷の重箱で鰻を食つてゐるんでさあ。あん畜生人を馬鹿にしてやがる。（立ち上りて。）ご免なさいまし。またお邪魔に伺ひますよ。（階子段の方へ歩む。）
新太郎。（句樂に。）何處へ往くんだい。
句樂。（立ち留りて。）山谷までさ。私だつて女には會ひてえやね。
新太郎。よした方が好いだらう。句樂さん。あんな薄情な女に會つたつて仕方がないぢやないか。
句樂。薄情ですつて——そいつはあなたがあの女を好く知らねえからだ。あんな親切な女はありやあしねえ。全くですせ。誰が何と

云つても、私はあの女が薄情だとは思はないね。（また坐りて。）考へて見りやあ可哀想な女さ。あいつの父つて云ふのは旅役者で、そいつが金に困つたもんだから、娘を賣つてしまつたつてやつなんだ。（おぎんを見て急に笑ひ出す。）　はははは、田之助の幽靈め。默つておれの話を聽いてゐやがらあ。面白れえ、面白れえ、こんな面白れえことはねえ。全く舞臺で見た時とちつとも變らねえからをかしいや。（新太郎に。）　ねえ。若旦那、世の中に幽靈なんてねえなんて云ふやつがあるが、あいつは嘘ですぜ。幽靈はたしかにあるに違ひねえ、誰でもみんな靈魂のねえやつはねえだらう。靈魂つてやつは圓い硝子の壜なんだが、そのなかに入つてゐる水の色が

人によつて違ふんだ。眞っ赤なやつがあるかと思ふと、眞っ青なやつがある、中には眞っ黑なやつがあるけれども、こいつは一番少ないのさ。しかしこの眞っ黑なやつは今にだんだん多くなつて來るね。私のも眞っ黑だ。あなたのも眞っ黑だ。（間。）　この靈魂を時時壞すやつがあるんだね。何しろ硝子だから直ぐ壞れらあね。さうすると大變だ。直ぐ氣狂ひになつてしまふ——

新太郎。さうするとお前は——（言ひ懸けて止む。）

句樂。（關はず話し續く。）　だんだん世の中が惡くなるに從つて、この靈魂を壞すやつが多くなつて來るのだ。あつちでもこつちでも靈魂を壞す。さうすると硝子のかけらが風に吹き飛ばされて、何處へ

往つても靈魂の粉なだらけだ。しまひには世の中が氣狂ひで一杯になる。もうさうなると理屈も何もあつたもんぢやねえ。毎日々々人殺しがある。あつちでもこつちでも血醒い噂ばつかりだ。人間がすつかり死に絶えてしまふまでその騒ぎが續くんだね。

新太郎。そいつは大變だな。不動樣を信心しても駄目なのかい。

句樂。不動樣だつてやつぱりしまひには氣が狂つてしまはあね。

（階子段を昇りておとし出づ。續いて樫村虎彦出づ。二十五六歳位の青年。髭を生やしゐる。）

おとし。直ぐ來ようと思つたんですが、お醫者樣の所へ往つたりなんかしてゐたものですからおそくなつてしまひました。如何もお

騒がせ申して濟みません。

樫村。今句樂さんの所へ君のゐる所を聽きに往くと、また氣が狂つたつて話だもんだから驚いたのだよ。

新太郎。さうか。可哀想に——なかなかほんとに快くなるまでは大變らしいね。

おとし。（句樂に。）さあ、兄さん、家へ歸らうよ。

句樂。誰の家へよ。

おとし。兄さんの家へさ。

句樂。おれの家なんぞありやしねえよ。家なんぞあつて堪るものか。家は墓見てえなものだ。唯家には生きた人間が住んでゐるが、墓

には死んだ人間が住んでゐる。たつたそれだけの違えぢやねえか。

おとし。（不圖氣きて。）何を云つてゐるんだね。さあ、紫君さんが待つてゐるから早く往かうよ。

句樂。ほんとか。それなら歸らう。

新太郎。（おとしに。）大丈夫かい。

おとし。（頷く。）ええ。

（句樂は立ち上りておとしと共に階子段より去る。）

おぎん。ほんとにおとしさんが可哀想ですね。

新太郎。もうあの病氣は快くなりさうもないやうな氣がするね。好

い藝人を惜しいものだ。（間。）樫村君。君はあゝ云ふ藝人の末路を考へたことがあるかい。

樫村。そりやあるよ。今まで句樂に會ふ度に、何時もそんなことを考へたよ。

新太郎。さうだらう。句樂を見ると誰でもそんなことを考へずにはゐられないよ。（感傷的に。）しかしあいつはあゝやつて氣が狂つてゐる方が幸福なのだ。世の中にはさう云ふ人が大勢ゐるよ。氣が狂つた方が幸福な人が——

樫村。君だの僕だのもやつぱりその仲間かね。

新太郎。さうさ。だんだんその仲間に入つて往くやうだね。

おぎん。まあ、氣狂ひのお仲間入りなんて眞つ平ですわ。

新太郎。お前は大丈夫だよ。しかしお前は今にあのおとしさんのやうに、氣狂ひの介抱をしなけりやあならないぜ。

おぎん。あんなことを――もうそんな厭なことを云ふのはおよしなさいまし。

樫村。（快活に笑ふ。）つまらないことを云つてゐる。（急に眞面目に。）さつきあれから橋場のお宅へ往つておつ母さんにだけお目に懸つたがね。お父うさん大分怒つてをられるらしいよ。

新太郎。（冷笑の調子。）さうかい。家の體面を汚したつて云つたらう。お極り文句だ。

樫村。うん。そんなことも云つてをられたやうだつたよ。それでもう一度よくお話しをすることにして來たのだよ。（磊落なる態度にて。）考へて見りやあつまらないなあ。もうよせよ。家なんぞ繼ぐのは。それよりこの二階にかうやつてゐる方が餘つ程好いぞ。

おぎん。しかし私何だか濟まないやうな氣がいたしますわ。

新太郎　好いよ。心配しなくつても。どうせおれはかうなるべき人間なんだからね。

（沈默。三人は各異りたる想に耽る。）

樫村。（突然。）如何したらうなあ。句樂は。ちよつと家へ往つて樣子を見て來らあ。

新太郎。さうか。直ぐ歸つて來るだらうね。

樫村。うん。

（樫村は階子段を降りて去る。）

おぎん。私お宅のことを考へると氣になつてなりません。奥様なんかさぞ私をひどい女だと思つていらしやいませうね。

新太郎。（面倒臭ささうに。）如何思つてゐたつて好いぢやないか。そんなことを心配してゐたらきりがないよ。

おぎん。（悲しげにうな垂れて。）ええ。しかしあなたは何時迄も私と一所にゐて下さるでせうねえ。私もしあなたから棄てられるやうなことがあつたら、それこそもう生きてはをりませんよ。（泣く。）

新太郎。お前を棄てる——そんなことがおれに出來ると思つてゐるのかい。（おぎんの肩に手を手けて。）さあ、もう泣くのはおよし。そんな泣き顔を樫村に見られたりすると變だよ。

おぎん。ほんとに私もしあなたから棄てられたら。身でも投げて死んぢまひますわ。

新太郎。（いぢらしげにおぎんの横顔を見る。）さあ、もうそんなことを云ふのはおよし。ほんとにお前は氣の小さい女だね。（慰めて。）かうやつて家も何も棄ててしまつて、お前と一所に暮らさうとしてゐる位ぢやないか。お前を棄てるなんてことがあるものか。そりやあお前の取越苦勞だよ。

おぎん。取越苦勞だとすりやあ安心ですけれど——（泣き止みて涙を拭く。）
目の緣が赤くなつてゐるでせう。
新太郎。ああ、少し——
おぎん。樫村さんが見て泣いたつてことが分るか知ら——
新太郎。分るものか。あいつはそんなことには氣が付かないよ。
おぎん。もし泣いたつてことが知れると何だか極りが惡うございますわ。
（遠く半鐘の音聽ゆ。）
新太郎。おや、鐘を鳴らしてゐるね。幾つ番なんだらう。
おぎん。遠くのやうですわね。

新太郎。（數へて。）それでも三つ番だよ。
おぎん。何處でせう。
（近くにても半鐘を打ち始む。新太郎とおぎんは立ち上りて障子を開く。雪の積れる屋根を越して、空に映れる淺草公園の灯明り見ゆ。二人は寄り添ふやうにして窓より外を見る。）
新太郎。寒いだらう。
おぎん。ええ。（屋根のあなたを差して。）あら、あすこですわ。
新太郎。馬鹿なことを云つちやいけないよ。ありやあ公園の灯が映つてゐるのだよ。
おぎん。さうですか。それぢや火事は何處でせうね。

新太郎。何だかここからは見えないやうだね。

（樫村階子段を上りて出づ。）

樫村。火事だな。ここから見えるのかい。

新太郎。ううん。まるで見えない。何處だらうな。

樫村。さあ——今下の娘が交番へ聽きに往つたやうだから、もうぢき歸つて來ると分るだらう。

新太郎。如何したい、句樂は。

樫村。ぐつすり寢込んでしまつてゐたよ。あれできつと二日位寢通すのだぜ。可哀想にあの妹つて女は傍に坐つてぼんやりしてゐるのさ。（不思議なることを見出せる如く。）君。句樂はあの前にゐる清元の

お師匠さんに惚れてゐたらしいね。如何もそれで氣が狂つたのらしいよ。

新太郎。さうかね。僕はまた句樂が僕とおぎんとを見て、昔の自分の姿をまざまざと見せられたやうな氣がして、あんなになつたのぢやあないかと思つてゐたのだよ。

樫村。さうさなあ。そんなこともあるかも知れない。しかし今まで皮肉や洒落ばかり云つてゐた男が、急にあんなに氣が狂つてしまつたりなんかするのを見ると、何だかお互ひにかうやつて話し合つてゐるのさへ不思議なことのやうに思はれて來るね。

新太郎。さう云へば世の中のことはみんな不思議さ。ああやつて鳴

つてゐる鐘の音さへ不思議に聽えるだらう。

樫村。さうだな。（間。）もう下の娘は歸つたらう。

新太郎。（おぎんに。）お前ちよつと往つて聽いて來て呉れないか。

（おぎん階子段を降りて去る。半鐘の音止む。急に寂寞となる。）

樫村。如何したんだい。馬鹿に考へ込んでゐるぢやないか。

新太郎。何だか句樂が氣が狂つてしまつたと思ふと、急に世の中が寂しくなつたやうな心持がして來たのだ。

（おぎん階子段を昇りて出づ。）

おぎん。瓦町ですつて——まだ燃えてゐるんださうでございますよ。

樫村。（驚いて。）瓦町——そいつは大變だ。僕の家が燒けてゐるかも知れない。

新太郎。そんなことはないだらう。

樫村。兎に角僕は歸るよ。それではいづれまた會つて話さう。

新太郎。どうぞちよくちよくやつて來て呉れたまへ。

（樫村は階子段を降りて去る。二人は階子段の上まで見送る。）

新太郎。さやうなら。

樫村の聲。（階子段の下より。）さやうなら。

（二人は戻り、火鉢の傍に坐る。）

おぎん。まさか樫村さんのお宅が燒けてゐるんぢやないでせうね。

新太郎。さうぢやないだらうと思ふがね。（窓の方を見て。）おや、障子を開けたままだつたね。道理で寒いと思つた。（立ち上らむとす。）

おぎん。（立ち上りて。）私が閉めますからよろしうございます（障子を閉づ。）

新太郎。（坐り直して。）まだ心細いやうな氣がするかい。

おぎん。いいえ。あなたさへ傍にゐて下さるなら——しかしこれからあなたは如何なさるおつもり。

新太郎。仕方がないから何か書くのさ。さうしてしまひには句樂のやうになつてしまふのだらう。

おぎん。（わざとらしく戰慄して。）笑談にもそんなことは云はないで下さ

い。あなたがあんな氣狂ひになるなんて——まあ。考へても怖しいやうな氣がいたしますわ。

新太郎。（笑つて。）笑談だよ。さあ、もうそんな話はよさう、もつとこつちへお寄りよ。（おぎんの手を握る。）

おぎん。（新太郎に寄り懸つて。）私何時までもかうして二人で暮らしたうございますわ。

新太郎。まあ、何時までもかうやつて暮さうよ。たつた二人で——

おぎん。ええ。

新太郎。ね、好いだらう。

（二人は接吻す。長き間。

恍惚として目と目を見合せゐる。

遠く消火の半鐘の音聽え、續いて近くにても同じく消火の半鐘を打つ。）

新太郎。（目覺めたる如く。）火事も消えたやうだね。（間。）もう寢ようか。

（おぎんは默つて頷く。二人は猶恍惚として目と目を見合せゐる。幕。）

第三幕

藏前附近の大川の河岸に近きところ。中央より稍上手に寄りて盲目の落語家小しんの家。古き家なれども數寄なる造作にして四疊半と六疊との二間つづき。上手の四疊半の座敷の正面には椽側ありて障子を閉め切る。上手に襖の出入口

ありて臺所に通ず。壁に古き顏見世の番附など貼り付けあり。柱には句樂の「五月暗ややうやう湯錢酒の錢」と書きたる短冊を懸く。下手の六疊の正面は半窓。窓には障子を閉め切る。長火鉢茶簞笥など置く。下手に格子戸。

格子戸の前は狹き路次。その突き當りは直ぐに大川の河岸となる。路次の此方に船宿の一部現はる。軒に太き字にて「網德」と書きたる四角なる行燈を懸く。三月の始めの或る月夜。路次の彼方に大川の水の面の銀の如くに光れるが見ゆ。

（小しんとおたつとは長火鉢に向ひ合ひて坐りゐる。小しんは三十歲位の痩せたる男。盲目にして蹇。絕えず鬱憂なる表情を續く。たとへ快活なる言葉にて語る時ありとも。おたつは二十七八歲位の女。小しんの女房。小しんおたつに本を讀ませて一心にそれを聽きゐる。）

おたつ。（低き聲にて本を讀む。）『その時風來山人手に持し羽扇を與へて曰く。是はわが仙術の奧義をこめし團扇なり。抑この團扇を以てあをげば、暑き時は涼しき風出で、寒き時は暖かなる風を生じ、

飛ばんと思へば羽ともなり、海川にては船ともなり、遠近を知り幽微を見る、身を隱さんと思へば忽ちにして見えざる、奇妙稀代の重寶なり。以て天地の間を往來し、諸國の人情を知るべし。汝が修業成就して、再びこの土に歸りし時、また對面をなすべし。

さらばさらばと云ふ聲は、障子に殘る風の音、淺之進は茫然と光明院の窓の内に、眠るともなく覺むるともなく、机にかかりてもとの如く坐し居たるに、側を見ればかの夢中に授かりし、羽扇ばかりぞ殘りける。』（つまらなさうに。）何だい。ちつとも面白くないぢやないか。

小しん。馬鹿云つてやがらあ。これからが面白くなるんだ。こりや

あ句樂の好きな本なんだぜ。しかしまあ今夜はそこまでにして置かうよ。

おたつ。さうかい。私はもつと讀んだつて關はないよ。しかしこの前讀んだ『梅暦』の方が餘つ程面白かつたね。

小しん。（寂しげに笑ふ。）『梅暦』を讀んでゐる時分は、おれがもう好いつて云つても聽かずに讀んだな。しまひには文句まで覺えつちまひやがつたじやねえか。おれも昔は『梅暦』が好きだつたが——

おたつ。おや、おや、大變年寄染みたことを云ひ出したね。

小しん。（何事か思ひ出して。）あの時分は面白かつたなあ。おれと句樂と焉馬の三人で、ずゐぶんいろんなことをして遊んだものさ。そ

れが今じやあおれがこんな盲目になるし。句樂は狂人になりやがるし、達者なのは焉馬ばかりだ。

おたつ。何だね。今更そんなことを云つたつて仕方がないじやないか。

小しん。うん。（間。）　さう云やあ句樂はどんな樣子だらう。この四五日あんさり好くねえつて話だが、まだ死にやあしねえだらうなあ。

おたつ。何しろあんな病氣だからねえ。何時どんなことがあるか知れやしないよ。一昨日もおとしさんが來て話してゐたが、相變らず不動樣ばかり拜んでゐるのだとさ。

小しん。ふん、おとしさんが來たのかい。一昨日と云やあおれが山崎の若旦那の所へ往つてた留守だな。あいつの不動樣も久しいものだ。一昨日も若旦那とあいつの不動樣の話をしたんだが——何しろまだ死なせたくねえものだな。今時あの位の落語家はありやしねえ。そりやあずゐぶん飲んだくれの怠惰者だが、あれであいつの云ふことは變つてゐて面白いよ。（悲しげに溜息を吐きて。）句樂が死んでしまつたらどんなにこの世の中が寂しくなるか知れやしねえ。

おたつ。しかしあんな狂人になつてしまつてはもう仕方がないね。何しろ可哀さうなのはおとしさんさ。兄さんの看病で夜の目も寢

ないものだから、一昨日來た時なんぞはすつかり窶れてしまつてゐるのさ。

小しん。あの女も不仕合せな女さね。女郎に賣られてさんざ苦勞をした揚句が、あの兄貴があんな有樣なんだらう。何時まで苦勞するのだか分らねえやうなものだ。（しんみりしたる調子になりて。）おとしさんばかりぢやねえ。おれはお前にも濟まねえと思つてゐるよ。こんな盲目を亭主に持つて、さぞ世話が燒けるだらうが、まあ何かの因緣だと思つて辛抱してくんねえよ。

おたつ。何を云つてゐるんだね。そんな澤市のやうなことは云ひつこなしさ。

小しん。（わざと涙を紛らすやうに笑ふ。）到頭澤市にされつちまつたな。

（二人は寂しげに笑ふ。
下手より焉馬と柳橋出づ。二人とも落語家。焉馬は三十五六歳位。柳橋は四十七八歳位。二人とも稍酒に醉ひゐる。焉馬は手に竹の皮包をぶら下げゐる。）

焉馬。（格子戸を開けて。）如何したい。久しく會はなかつたな。

小しん。誰だ。焉馬か。まあ上んねえ。

焉馬。うん、柳橋さんと一所なんだよ、何だかいやに沈んでゐるぢやねえか。（座敷に上つて。）おい、おたつさん。うめえものを持つて來たぜ。（竹の皮包を渡す。）

おたつ。何だい、焉馬さん。（開きて。）おや、おや、鰒だね。

柳橋。（座敷に上つて。）今そいつで一杯やつて來たところさ。

小しん。鰒か。そいつは難有てえ。早速一杯やらかさうぢやねえか。おたつ、酒の支度をしてくんねえ。（二人に向ひて。）一體今日は何處の歸りなんだね。

（おたつは上手へ入る。）

柳橋。なにね、今日は句樂の病院へ二人で見舞に往つて來たんだよ。

小しん。今日はまた席を拔いたんだな。何しろ二人とも席を拔くのは名人だぜ。

焉馬。お前さんだつて昔はあんまり拔かない方でもなかつたぜ。

（焉馬に柳橋は上手の四疊半の方へ來る。勝手に座布團を出して敷く。）

小しん。（獨語のやうに。）もうおれは高座の湯の味も忘れてしまつたなあ。考へて見れば席へ出なくなつてから、もうかれこれ二年になるぜ。

柳橋。もうそんなことを云ひなさんな。（慰めるやうに。）句樂はあんなに狂人になつても、お前のことばかり云つてゐるんだぜ。なあ、焉馬。今日も句樂は小しんのことばかり云つてゐたな。

焉馬。うん。（小しんに）何だか今日はお前と遊んだ時のことを話してゐやがつたよ。その時はあいつの目には、まるで紫君とお前との二人しか見えねえやうなのよ。あいつが死んだ紫君がまだそこにゐるつもりで、何か口說見てえなことを云つてゐやがるのを聽い

てゐると、おりやあ可哀さうになつて涙がこぼれたよ。

小しん。句樂はまだあの女のことが忘れられねえんだなあ。

焉馬。それからお前に云つてゐる話と云ふのが面白れえんだ。何でもお前が盲目になつたのを、慰めてゐるやうな樣子なんだが、その文句が不思議な文句さ。

小しん。へえ、ひとつその文句を伺ひたいものだね。

焉馬。何でも人間にやあ目なんてものは入らねえ。みんな目があるから本當にものを見ることが出來ねえんだ。それだからお前は盲目になつたから仕合せな男だ——とかう云ふんだ。さうして句樂は今に法律を作つて、日本中の人間はみんな盲目にしてしまふ。

何でも大きな役所を作つて、そこで大勢の役人が片つ端から、呼び出した人間の目を潰すんださうだ。

小しん。（皮肉に笑つた。）自分の目は如何する氣なんだらう。

焉馬。お役人に目を潰されるのは氣が利かねえから、おりやあ自分で潰してしまふんだつて云つてゐたよ。

小しん。成程ね。盲目になつた方が仕合せかも知れねえなあ。

焉馬。さうして今日はずゐぶん饒舌つてゐやがつたが、聽いてゐて何のことだか分らねえことの方が多いんだ。（柳橋に。）なあ、柳橋さん、どんなことを云つてゐやがつたつけな。

柳橋。さうさ、蝮の吉兵衛さんの話が大分出てゐたやうだつたせ。

（他の二人に。）　蝮の吉兵衛さんつて一體何なんだね。

小しん。おや、柳橋さんは蝮の吉兵衛さんのことを知らねえのかね。

芝の仕事師で小唄の巧かつた人のことだよ。

柳橋。へえ、お前はよく知つてゐるね。

焉馬、蝮の吉兵衛さんのことなら私だつて知つてゐらあね。

小しん。うん、お前もよく句樂から聽かされたなあ。さうしてその蝮の吉兵衛さんが如何したつて云ふ話なんですね。

柳橋。それが如何したつて云ふんだかよく分らねえのさ。何でも句樂が始めてその蝮の吉兵衛さんに會つた時の話らしいのだよ。

焉馬。全く小唄は巧かつたさうだね。句樂はよく云つてゐたぜ。あ

いつが生れてから以來、ああ生きてゐた甲斐があつたと思つたのは、その蝮の吉兵衛さんの歌を聽いた時だけださうだ。

柳橋。その人はまだ達者でゐるのかい。

小しん。もう疾うに亡くなつたとも云ふし、まだ生きてゐるとも云ふし、何だかよく分らねえんですよ。何しろ狂人の云ふことだから當になりやあしませんよ。（上手の方に向ひて。）　おい、おたつ、早くしねえな。

（おたつは酒の支度をしたる膳を持ちて上手より出づ。）

おたつ。ほんとに何にもありませんよ。

小しん。まあ好いや。お持たせの鰒で一杯やらう。

焉馬。なあに酒さへありやあ澤山だ。

（おたつは上手の座敷に膳を置き、小しんを助けてその傍に連れ來る。）

小しん。（自分を嘲けるやうに。）盲目で蹇と來てゐるんだからたまらねえ。近頃は乞食にだつてこんなのはゐやしねえぜ。

焉馬。（猪口を取り上げて。）おや、こいつは八百善の猪口ぢやねえか。

小しん。うん、そいつは句樂が古道具屋で二錢で買つて來やがつたのよ。

焉馬。さうか。それぢやこいつで一杯飲むとしよう。

（おたつは焉馬の杯に酒を注ぐ。三人は酒を飲み始む。三人とも沈默。稍長き間）

柳橋。如何したんだい。みんないやに滅入つてゐるぢやなえか。

おたつ。焉馬さん、お前さんまで今夜は沈んでゐるんだね。いつもの通りに騷いだら好いぢやないか。

焉馬。何ね。さつきから大分飲つてゐるんだが、如何も今日は醉はなくつていけねえのよ。

小しん。酒を飲んで醉はねえなんて、そんな箆棒な話があるものかな。

焉馬。よし來た。それならこれからうんと醉ふぜ。

小しん。ああ、好いとも。うんと醉ひねえ。いくら醉つたつて驚きやあしねえから——

柳橋。おりやあ驚くね。焉馬が酔つぱらつたと來ちやあ手が附けられねえんだからな。この間も二人で一杯やると、これがまた席を拔くやうなことになつたのさ。さうしてそこにお神輿を据えてしまつて、二人でふんだんに飲んだものなんだ。

小しん。何處でよ、一體——

柳橋。傳法院横丁の例のところよ。

小しん。(面白さうに笑つて。) またお菊さんの所へ往つたんだな。

焉馬。(小しんに。) お菊さんはお前に馬鹿な惚れやうをしてゐるぜ。なあ、柳橋さん。この間も小しんさんの目は如何かして好くならないかつて云つてゐたな。

小しん。(落語に出で來る通人の如き調子にて。) 如何でげす。盲目になつても小しんには女が惚れやせう。

焉馬。(同じやうに。) それでも焉馬師匠には、あの女はぞつこん惚れてゐるんでげすからな。

小しん。(調子に乘つて。) さう云やあ焉馬つて男も可哀さうなものでげす。あの女に小しんと云ふ色男がちやんと附いてゐるんですぜ。

柳橋。(呆れたるやうに。) おや、おや、何が何だか話がさつぱり分らなくなつて來たぜ。

小しん。話つて云やあさつきの話の續きを聽きてえものだな。焉馬師匠大とらの段つてやつさ。大川亭柳橋先生、如何です、一席や

つて下さいな。

柳橋。（間を置いて。）それからよ。あすこの家を出たのがもうかれこれ十二時なんだ。二人とも家へ歸るのは厭だし、何處か遊びに往くのには金はなし、仕方がねえからぶらぶら茶畑を通り抜けて、二天門の方へ歩いて往つたのよ。別に何處へ往くつて當はねえんだが、ひとりでに足の向いた方へ歩いて往つたものさ。こんな時は何でもするね。若しも惚れた女が死ねつて云つたら、死んだかも知れねえよ。

焉馬。（氣が無ささうに。）笑談云つちやいけねえ。

柳橋。それから馬道へ出ると、こいつが如何でえひとつ若旦那の所へ押し懸けやうぢやねえかつて云ひ出したんだ。おりやあもう晩いから止せつて云つたんだが、如何しても聽かねえ。仕方がねえからおれも一所にあの煙草屋を敲き起して、あの二階へ押し上つたものさ。

小しん。ふん、こいつは若旦那も驚いたらうなあ。

おたつ。全く焉馬さんに會つちやあ敵はないね。

柳橋。まあ、それまでは何でもないんだがね。

焉馬。もう止しねえな。あんまり面白くもねえ話だぜ。

小しん。（焉馬に。）まあ好いやな。（柳橋に。）それから如何したのよ。

柳橋。いや、それからが騒ぎなんだ。まあ歌つたり踊つたりしたま

では好かつたが、しまひにはこいつがあのおぎんさんに戯ひ始めやがつたのさ。それが醉つて執拗いと來てゐるからたまらねえや。あの氣の弱いおぎんさんのことだから、到頭泣き出してしまつたのよ。おりやあんなに困つたことはなかつたぜ。やつと引つ張り出してこいつの家へ送り込んで、家へ歸るともう夜が明けてゐるぢやねえか。何しろ若旦那の所へはちよつと顔出しが出來ねえ始末になつちまつたんだ。

小しん。（笑って。）焉馬はいつも酒と女でしくじるなあ。もつともそれより外に能のねえ男だが——

焉馬。ひでえことになつたもんだな。

小しん。何もそんなに悄氣なさんな。そんなことは句樂は毎日やつて來たんだあな。（急に悲しげに。）しかし句樂もとだ死なせたくはねえなあ。おりやあ目が見えなくなつてから、如何云ふものだかあいつの云つた言葉ばかり思ひ出されて仕方がねえ。あいつは全く唯の落語家ぢやあねえぜ。あいつの考へてゐることはみんな眞實のことばかりだ。盲目にならねえ前には氣が付かなかつたことも、かうやつて盲目になつてから考へて見ると、あいつ位眞實のことを云つてゐたやつはありやしねえ。

焉馬。（不思議さうに。）さうかなあ。おりやああいつ位嘘吐きはねえと思つてゐたんだぜ。

小しん。おれも盲目にならねえ前は、やつぱりさう思つてゐたものよ。句樂のやつまた法螺を吹き出しやがつたと思つて、別段氣にも留めずに聽いてゐたが、今考へて見りやあそりやあみんな眞實だつたんだな。全く不思議なやうに近頃はあいつの言つた言葉を思ひ出すよ。（考へるやうな顏付をして。）句樂はよくこんなことを云つてゐたらう。人間の靈魂つてやつは、硝子の壜見てえなものだつて——あいつはほんとだぜ。おれは盲目になつてからその硝子の壜見てえなものが、目の前にちらついて仕方がねえんだ。

柳橋。變なことを云ひ出したな。句樂見てえなこと云つちやあいけねえぜ。

おたつ。ほんとに近頃は餘つ程云ふことが變なんですよ。

小しん。それが凡夫の淺猿しさね。おれの云ふことが變に聽えるやうぢやあ、まだまだ中々句樂の云ふことは分りやあしねえよ。

焉馬。おい、もうそんな話は止しねえな。それより飲んでうんと騷がうぢやねえか。

小しん。まあ、待ちな。もう少しおれの話を聽いてくれても好いだらう。（間。）それからまた句樂がこんなことを云つたことがあるんだ。この世の中位馬鹿々々しい所はねえ。何が嘘で何が眞實だかまるつきり分りやあしねえ。しかしその中でたつたひとつ誰でも眞實にしてゐることがある。そりやあ死ぬつて云ふことだ。

（馬場はつまらなさうに低き聲にて歌を歌ひゐる。）

柳橋。死ぬなんて話は止さうぢやねえか。

小しん。それぢやあこの話は止めにしよう。だが如何だい、今日の句樂の樣子は——

柳橋。今日は大變元氣だつたぜ。おれ達があいつの部屋に入ると、丁度あいつは本を讀んでゐるところさ。何を讀んでゐるのかと思つて見ると、それは例の風流志道軒傳なのよ。

小しん。（驚きて。）おや、おれもさつきまでそいつを讀んでゐたんだぜ。

柳橋。（同じやうに驚きて。）さうかい。そいつは不思議だな。（間。）そ

れから三人でいろんな話をしたんだが、相變らず句樂のやつは傍に紫君がゐる氣でゐるらしいんだね。またいつもの通り蝮の吉兵衛さんの話をする時分になるともう分らねえ。小猿七之助だの、鳥追お松だの、しまひには白井左近まで出たつけ。そのうちあいつは如何云ふ氣だか運座をやらうつて云ひ出しやがつたのよ。

小しん。さうか。運座をやつたのか。

馬場。（柳橋に代りて話し續く。）やつたことはやつたが、句樂の句が面白れえのよ。なあ、柳橋さん。何とか云つたな。句樂の句は——

柳橋。さうよ。さつきまで覺えてゐたんだが——ええと、ひとつはかう云ふんだ。グランドの植ゑし櫻は燕枝かな。如何でえ、何だ

かさつぱり分らねえだらう。

焉馬。それからもうひとつ面白れえ句があつたな。それ、清正公が何とか云ふやつよ。

柳橋。うん、盲目の清正公や初櫻つてやつだらう。

焉馬。この盲目つて云ふのは、やつぱりお前のことを考へてゐたからのことなんだね。

小しん。面白れえな。狂人中々味をやるぢやねえか。

焉馬。うん。まあ運座までは好かつたんだが、それから凄い一幕があつたんだぜ。

小しん。如何したのよ。

焉馬。お前も知つてゐるだらう。あいつが大事にしてゐる嫐の根付の着いた煙草入があるだらう。急に立ち上つてあいつを出して來たから、何をするのかと思つたら、句樂のやつ凄い顔をしてあの根付を睨み付けてゐやがるのよ。さうしてまた始めやがつたなんて云ふじやねえか。

小しん。ふん、それから——

焉馬。さうしてあいつはそれから悲しさうな顔付で、あの嫐の根付の話を始めやがつたのよ。よく聽いて見ると何でも句樂の目にはその根付が、あいつが子供の時分に見たつて云ふ、夜嵐お絹の曝し首に見えるらしいんだね。それがしまひにはまるで惚れた女に

でも會つてゐるやうな調子で、もう直きお前の所へ往くから待つてゐてくれの、久しく會はねえのと、いろんなことを云つてゐるのよ。その時の句樂の顔付つたらなかつたせ。二人は氣味が惡くなつて、直ぐに歸つてしまつたのよ。（間。）　あいつももうあんまり長げえことはねえせ。

小しん。さうさな。おれも如何もそんな氣がして仕方がねえんだ。

しかしおれも今日やつぱり風流志道軒傳を讀んでゐたんだが——

焉馬。何もそんなことを氣にしなくつても好いぢやねえか。

小しん。何も氣にしやしねえけれど——何だか馬鹿に句樂に會ひてえやうな氣がするよ。會つたつて顔を見ることも出來ねえんだけ

れど、せめて話でもしてえなあ。

（下手より新太郎出づ。二十二三歳位。直ぐ格子戸を開きて家の中へ入る。）

新太郎。やあ。みんなお揃ひだな。（座敷に上り來る。）

小しん。若旦那ですね。今丁度一杯やつてゐるところでさあ。

おたつ。（座布團を進めて。）さあ、若旦那。どうぞお敷き下さいまし。

新太郎。相變らず無賴漢が集つてゐるんだね。

焉馬。いや、どうも——若旦那、先日はどうも相濟みません。

新太郎。なあに濟むも濟まないもありやしないよ。それよりも僕はあれから如何したかと思つて心配してゐたんだよ。

小しん。しかし若旦那はえらいよ。一昨日私が伺つた時に、そんな

話はちつともしなかつたね。

馮馬。（抔を新太郎に差す。）若旦那、ひとつ如何です。

新太郎。や、難有う。如何だい、馮馬さん。何か面白いことでもないかね。

馮馬。面白いことつてまるつきりありませんね。第一世の中が惡くなりましたよ。女だつてほんとに惚れて來るやうなやつはありませんせ。

小しん。しかし若旦那のおぎんさんはありやあ別さ。

馮馬。おぎんさんて云やあ、まだ追手は懸りませんかね。

新太郎。家でも呆れてしまつたと見えて、何とも云つて來ないやうだよ。

柳橋。（始めは歌ふやうに。）野暮な屋敷の大小棄てて、腰も身輕な町住居つてね。若旦那もこれで洒落れた人さ。

新太郎。あんまり洒落れてもゐやしないよ。しかしあの煙草屋の二階を借りた當座は、何だか二人でゐるのが寂しかつたけれど、馴れてしまふと結局氣樂さ。かうやつて世間を忘れたやうにして暮らしてゐるのも、また面白いやうな氣がするね。

小しん。全くさうですよ。一體世間なんてものを相手にしてゐたらきりがありませんや。（怒れる如き調子にて。）世間ぐらゐ始末にならねえものはありやあしねえ。まあ、盲目になつてご覽なさい。そ

の世間つてやつがはつきり形に現はれて來さすせ。頭もなければ尻つ尾もねえ。まるで妲妃のお百の芝居に出て來る海坊主のやうなもんでさあね。

馬。馬鹿なことを云つちやあいけねえせ。

小しん。嘘ぢやあねえよ。全くさう云ふものが見えるんだから不思議さね。だから私は盲目になつても、いろいろ今まで見えなかつたものが見えるから面白いのさ。私は自分の盲目になつたことなんぞは何とも思はねえが、唯氣になつて仕方かねえのは句樂ばかりさ。

新太郎。さうさね。如何も今度はすこし覺束ないやうだね。

小しん。ええ、今日も柳橋さんと焉馬とが、病院へ見舞に往つて來たさうですが、元氣は中々あるけれど云ふことが大分變なんださうですよ。今日はあの嫐の根付の着いた煙草入ね——若旦那もご存知でせう——あれと話をしてゐたさだうすよ。

新太郎。あれは句樂が大事にしてゐた煙草入だせ。

小しん。ええ。あいつは句樂が生命よりも大事にしてゐたもんですよ。きつとあの煙草入が句樂に何か話し懸けるんでせう。私はさうに違えねえと思ふんだが——

新太郎。さう、さう、何時だか枕元に置いてあつた水差が、口をきいたつて話があつたつけなあ。

小しん。やつぱりそれと同じわけさね。

焉馬。しかしそいつを傍で見てゐると、何だか涙がこぼれるやうな心持がしますぜ。あいつと一所に遊んだ時分のことを考へたりして、ああ句樂もへんになりやがつたかと思ふと、人間つてものは分らねえものだと、私はつくづく考へましたね。

新太郎。（笑って。）焉馬さんもそんなことを考へるかな。

焉馬。そりやあ私だつて考へまさあね。

小しん。（沈みたる調子にて。）こんな落語家見てえな稼業してゐるものは存外哀れなことばかり考へてゐるものですよ。

（沈默。新太郎は悲しげに小しんの顏を凝視しゐる。）

柳橋。いやに話が理に落ちて來たぢやねえか。如何でえ。もう少し杯を動かさうぢやねえか。

焉馬。（急にはしやぎ出す）。よし來た。さあ。今夜は飲み明かさうぜ。

小しん。盲目ながらも柳亭小しんだ。そんなことは敢て辭しやせんな。ねえ、若旦那、あなたも私達の仲間入りをした以上は、飲み明かす位のことは怖れねえでせう。

新太郎。當り前さ。そんなことを怖がつてゐたら、ここの闘は跨げやしないやね。

（皆盛んに酒を飲む。
新太郎は座敷の隅に置きありし異樂なる形の兜に目を付く。）

新太郎。おい、小しんさん。そこに置いてある兜のやうなものは何だい。

小しん。あれが例の句樂の兜さ。

新太郎。變な形の兜だなあ。如何云ふ譯で句樂はあんな兜を作つたのだらう。何しろ大變なものを作りやがつたぢやないか。（焉馬に。）おい。焉馬さん。ちよつと取つて呉れないか。

（焉馬はその兜を取りて新太郎に渡す。）

焉馬。若旦那。まあその兜の裏をご覽なさい。持主俳諧亭句樂と書いたこつちに、柳田金次郎作と本名を書いたところがをかしいぢやありませんか。

小しん。ねえ、若旦那、句樂がこの兜を作つた譯が面白いんですせ。句樂はよく今に戰があるつて云つてましたらう。この前に氣が狂つた時から、そのことを云つちやあ騷いでゐましたよ。それ、金持と貧乏人の戰つてやつさ。句樂はその戰の時には貧乏人の大將になつて出懸けるんだつて云ふんで、一しよう懸命に作つたのがこの兜なんでさあ。この前の時にはこの兜を冠つて病院中を暴れ廻つて困つたさうですよ。

新太郎。ああ、その戰の話は僕も聽いたよ。それぢやあその戰に出懸けるつもりでこの兜を作つたんだね。（兜を凝視しゐる。）

小しん。ええ、あいつはその戰を今か今かと待ち構へてゐたんです

よ。だから病院に入つてゐても氣が氣ぢやあねえやね。それで軍書を讀むつもりで梅暦や風流志道軒傳を讀んでゐるんだから面白いよ。

焉馬。その兜から思ひ付いて句樂が作つた端唄があつたつけな。もう狂人になつてからだからずゐぶんをかしな文句がありましたせ。誰か覺えてゐねえかな。

小しん。うん。おりやあ覺えてゐるよ。

新太郎。さうかい。ちよつと歌つてお聽かせな。

焉馬。(おたつに。)おたつさん、ちよつと三味線を取つてくれないか。

(おたつは壁に掛けたる三味線を袋より出して焉馬に渡す。)

焉馬。(調子を合せて)。おい、この位で好いかい。

小しん。もつと調子を低くしてくんねえな。

焉馬。よし。(調子を低くす)。

小しん。おれもうろ覺えだから文句の違つてゐるところがあるかも知れねえよ。

焉馬。どうせ狂人の作つた唄だあな。

(小しんは歌ひ出さむとするも聲出てず。何時か涙が盲ひたる目の外に溢れ來る。焉馬は驚きて三味線の手を留め小しんの顔を見る。)

焉馬。如何したんだい。

小しん。(何氣なき樣子にて。)如何もしやしねえよ。さあ、彈いて呉れ。

顫え付きてえやうな好い聲を聽かしてやるから――

焉馬。（彈きつつ獨語のやうに。）久しく小しんの歌も聽かねえなあ。

小しん。（歌ひ出す）。

『死ねと云ふ、死なねばならぬ今日となり、紫君の髷の天神は、

諏訪法性のおん兜、一夜會はねばわれもまた、兜の下のきりぎ

りす、ほんに哀れぢやないかいな。

（歌へる間絶えず小しんの目より涙溢れ、頬を傳ふて流る。新太郎も目を瞑ませて聞きゐる。）

新太郎。おれは小しんさんの歌は始めて聽いたよ。

小しん。（寂しげに笑つて。）いや、もう大變な聲で――（焉馬に。）久しく

歌はねえから、これだけのもんでも苦しいね。

焉馬。さうだらうな。しかし變な文句だな。如何しても狂人の作つた唄だね。

柳橋。こいつにも紫君つて名が入つてゐるね。

焉馬。あいつは餘つ程紫君に惚れてゐやがつたんだな。

小しん。さう云やああんなに氣が變になつたのも、紫君が死んでからのことですぜ。

焉馬。（小しんに。）しかしお前さんの聲はすつかり變つてしまつたね。

小しん。そりやあ盲目になつてからは、如何しても聲の調子が變つ

てしまふよ。何しろ何處から聲を出して好いんだか、盲目になり立てには全るで見當が付きやあしねえもの――今まで見えてゐたのがまるで見えなくなつてしまふんだからなあ。毎日々々夜ばかりで眞つ暗な中から人の聲が聽えて來るんだから情ないやね。

焉馬。さあ、もうこんな話は止めにしねえ、おれが彈くからみんな歌ふんだぜ。さあ、柳橋さん、何かひとつやんねえな。

（焉馬は三味線を彈き始む。）

柳橋。（歌ひ出す。）

『かのひとをしんぞ思へばこの癪が、胸に差し込む窓の月、つづれさせてふ蟀蟋、年が明くれば詫住居、肩させすそさせ蟲の聲々、

世帶染みたと云はれたい。

（焉馬は一人面白さうにはしやぎゐる。）

焉馬。よう、よう、面白くなつて來たぜ。如何です、若旦那、何かひとつお歌ひなさいな。

新太郎。僕は歌へないよ。

小しん。笑談云つちやあいけません。私はちやんと知つてゐるんだから――

柳橋。若旦那、隱しつこなしさ。

新太郎。僕はほんとに歌へないんたよ。

焉馬。それぢやあ私がひとつやりませう。（彈きながら歌ふ。）

『裏の土藏のなか、姉やんとつんつらつん、片手に提灯片手に土藏の鍵、しばし待ちなはれ、髪を結ふてしまふてね、おつかあさんを寢せ置いて、お代理參りと云ふて出懸けませう、つんつらつんつらつん、四五日このかた會はなんだ、何から何まで話しましよ、勿體ないがお代理參りは、明日の晩といたしましよ、つんつらつんつらつんつらつん。

小しん。こいつは句樂が好きな歌だぜ。よし來た。おれももうひとつやらう。

馬。何をやるんだい。

小しん。身ひとつをつてやつよ。今夜は句樂の好きな歌をみんなやつてしまはうぢやねえか。

馬。うん。さあ、好いぜ。

小しん。（歌ひ出す。）

『身ひとつを置所なき胸のうち、一重の心八重に解き、指きり髪きり野暮な起請を神さんへ、お世話をかけて烏羽玉の、戀の闇路ぢやないかいかな。

（今度は小しんは涙を流さずに歌ふ。）

馬。うめえ、うめえ、今度のは昔の小しんの歌を聽いてゐるやうだつたぜ。

新太郎。今日句樂がゐたらさぞ面白かつたらうなあ。

小しん。あいつがゐねえと何だか寂しいやうな氣がしますね。
新太郎。句樂は今頃如何してゐるかなあ。
焉馬。若旦那。また蔚いでゐますね。

（この時河岸の近くを聲色つかひの舟通り過ぐ。拍子木の音など聽え來る。）

焉馬。ありやあ聲色つかひの舟だな。
小しん。うん、中洲や代地であぶれたやつが歸つてゆくのよ。
焉馬。如何でえ、あいつを呼ばうぢやねえか。
小しん。うん。あいつを呼んで柳橋さんの聲色でも聽くかな。
焉馬。（障子を開けて椽側へ出づ。）おおい、聲色屋あい。

（開けたる障子の間より大川の水の面、河向ふの灯明りなど見ゆ。舟の中にて聲

色つかひが「どうも難有うございます」と云ふ聲聽ゆ。焉馬は障子を閉めて元のところへ座る。）

小しん。（障子の外に向ひて。）おい、何でも好いからやつてくんねえ。
焉馬。好い景色だな。向ふ河岸はまるで芝居の書割のやうだつたせ。
小しん。さうか、おれにはそれが見えねえんだから情ねえ。

（聲色をつかふ聲聽ゆ。「梅雨小袖昔八丈」の閻魔堂橋の出會のところ。座敷にては關はずに話し續けゐる。）

新太郎。何だかこでかうやつて君達と話をしてゐると、家のことや世の中のことなんぞ忘れてしまふね。

小しん。さうでせう、あなたはどつちが好いと思ひますね、お宅にゐて堅苦しい學問をしてゐるのと、かうやつて呑氣に日を送つてゐるのと——私はかうやつて日を送る方が、人間眞實の暮らし方ぢやないかと思ひますがね。

新太郎。僕だつてさう思へばこそ家を飛び出して、あんな女と一所に暮らしてゐるのだ。

焉馬。しかし若旦那もずゐぶん變つた方さね。小間使と一所にあんな汚ない煙草屋の二階にゐるなんて——お宅にいらつしやりやあ若旦那で立派にやつてゆける方ぢやありませんか。

新太郎。それが嫌ひだから因果なんだよ。考へて見れば僕がこんな

ことを考へるやうになつたのも、みんな句樂の爲めだと思ふよ。句樂は僕に如何して生きたら好いかつてことを敎へて呉れたのだ。さうして僕はあいつの云ふ通りになつたのだ。

（聲色が終ると同時に急に寂寞となる。）

小しん。柳橋さん。丁度鳴物がお誂へだね。ひとつ十八番の大阪町でも聽かうぢやねえか。（障子の外に向ひて。）おい。鳴物だけやつてくんねえ。柳橋さん。何をやるね。

柳橋。さうさな。例によつて野晒悟助でもやらうよ。粹菩提悟道俠客——（聲色をつかふ。）

（柳橋の聲色の終る少し前に、おぎん下手より出で、格子戸の前に佇みゐる。）

柳橋（聲色を終って。）いや、如何もいけねえ、年を取ると聲が續かねえよ。

焉馬。まだそんな年でもねえぢやねえか。

小しん。（おたつに。）おい、おたつ。

（おたつは障子を開けて樣側に出て、聲色つかひに金を遣り、また元のところへ坐る。聲色つかひの舟は拍子木を打ちながら次第に遠ざかる。）

おぎん。（格子戸の外にて。）ご免下さいまし。

小しん。おや、誰だか來たやうだぜ。

おたつ。（立ち上りて。）どなた——關はないからお入んなさいましよ。

（おぎんを見て。）おやおぎんさんですね。

おぎん。（云ひにくさうに。）あの、何はこちらへ伺つてをりますでせうか。

おたつ。若旦那ですか。ええ、いらつしやいますよ。

新太郎。（坐れるまま。）おい、何か用があるのかい。

小しん。おぎんさん。まあ、お上んなさい。

（格子戸を開けて家の中に入り長火鉢の傍に座る。）

おぎん。あの今句樂さんからお使が來て、こんな手紙を持つてまゐりましたよ。（手紙を出す。）

新太郎。句樂から手紙だつて——何だか變だな。どらお見せ——柳橋さん、はばかり樣、取つて呉れないか。

（柳橋はおさんより手紙を受け取りて新太郎に渡す。）

新太郎。（手紙を開いて。）何だらう。

小しん。少しをかしうござんすね。句樂から手紙だなんて――あの狂人から手紙が來るなんてことはねえと思ふんだがね。

新太郎。さうさな。何だか不思議なやうな氣がするね。（手紙を見る。）何だかまるで讀めやしない。

小しん。若旦那。讀んで聽かして下さいよ。句樂の手紙なら私も聽きたいやね。

新太郎。ちよつとお待ちよ。今讀むから――（手紙を讀む。）私は今日より志道軒と一所に、旅をするつもりに御座候。何處へ往くと云

ふあてもなく、例の通り飄然として――飄然の飄の字に氷つて字が書いてあるせ。

馬馬。（笑つて。）飄然として溶けるつもりでゐやがるんだな。

新太郎。（手紙を讀み行く。）ええと、飄然として旅を致すべく候。志道軒と二人連れに候へば、何かと面白きこともあるだらうと思ひ、それが樂しみに御座候。くはしきことは旅先より申上ぐべく候。何だか發句見たいなものが書いてあるせ。（讀みにくさうに考へゐる。）行く春やきちがひ二人旅に出るか。

小しん。自分で狂人つて云つてるところは面白いね。しかし何だかまるで謎見てえな手紙ですね。あいつは如何云ふ氣でこんな手紙

をあなたの所へ寄越したのだらうな。

新太郎。おい、おぎん、この手紙を持つて來た人つて云ふのは、一體どんな人だつたい。

おぎん。何だか氣味の惡いお爺さんでしたわ。顏に一杯痘痕があつて、め組と書いた差つ子を着てゐましたよ。

小しん。（驚いて。）何ですつて、おぎんさん。そのお爺さんは顏に痘痕があつて、め組の差つ子を着てゐたんですか。

おぎん。ええ。

小しん。うん、それぢやあいつに違えねえ。なあ、焉馬。

焉馬。あいつつて誰よ。

小しん。今め組の差つ子を着てゐる人なんぞありやあしねえぜ。それに顏に痘痕があると云やあ大抵見當は付くだらう。

焉馬。分らねえな。

小しん。そいつは蝮の吉兵衛さんだぜ。

（皆驚きて顏を見合はす。下手よりおとし出づ。格子戸を開けて家の中に入る。）

おたつ。おや、おとしさんが見えましたよ。

焉馬。如何したい、おとしさん。

小しん。まあ、こつちへお上んなさい。今不思議な手紙を讀んでゐるところさ。

（おとしは座敷に通ると同時に急に泣き始む。）

新太郎。如何したんだ。

小しん。默つて泣いてゐちやあ分らねえ。

（沈默。）

おとし。（歔欷しつつ。）あの句樂が到頭さつき亡くなりまして——

新太郎。何だつて——句樂さんが死んだつて——ほんとかい。

おとし。ええ、急に容體が惡くなりまして、さつき到頭呼吸を引き取つてしまひました。

新太郎。さうか。句樂も到頭死んだのか——

（手紙を握りし新太郎の手は微かに顫ふ。）

おとし。さつき焉馬さんと柳橋さんがいらつしつた時分は何ともな

かつたのですが、あれからまた例の紫君と話を始めたのでございますよ。さうして一人で泣いたり笑つたりしてゐましたが、そのうち若旦那の所へ手紙を出すんだつて、何か書いては破つたりした揚句、しまひにやつと書き上げた手紙を持つて、外へ出懸けやうとするのでございます。

新太郎。（怖しさうに。）ふうん。僕の所へ手紙を書いたんだね。

おとし。ええ、さうすると若旦那、不思議ぢやあありませんか。あの部屋の戸がすうつと開いたのでございます。さうして誰か入つて來たやうな氣勢がしましたが、それと同時に兄は誰かと話を始めました。よくよくその言葉を聽いて見ると、それがあの蝮の吉

兵衛さんと話をしてゐるのぢやありませんか。

小しん。ねえ、若旦那。私の云つた通りでせう。

おとし。それから急に容體が惡くなりましてね。ものの一時間と經たないうちに呼吸を引き取つてしまつたのでございます。

（沈默。長き間。小しんと新太郎は聲を立てずに泣きゐる。）

焉馬。（おとしに。）おとしさん。今病院には誰もゐねえんだね。

おとし。ええ。病院の方が附いてゐるだけです。

柳橋。それぢやめ焉馬さん、おとしさんも女のことだし、何かと後の用事もあるだらうから、これから病院へ往つて來ようぢやねえか。

おとし。實はそのお願に上りましので——

焉馬。それぢやあ直ぐ出懸けやう。

小しん。おれが目が見えると一所に往くんだがなあ。

（柳橋とおとしは一所に格子戸より出て下手に入る。）

小しん。（悲しげに。）若旦那。到頭句樂も死んでしまひましたね。

新太郎。ああ、何だかまるで夢のやうな氣がするねえ。つひこの間まで一所に飲み歩いてゐたんだが——考へて見りやあ句樂が死んだことは、僕に取つてどの位悲しいことだか知れやしない。僕はあいつがゐるんでこんなにその日その日を送るやうな暮らし方をするやうになつたのだ。あいつの口から出る警句の中から、眞實

のことを聽くのを喜んで、今日までかうやつて暮して來たのだ。もうあいつが死んでしまつたら、あんな警句は聽くことは出來ないかなあ。

小しん。若旦那。私だつて句樂が死んだことがどんなに悲しいか知れやしねえ。あいつと私とは何か因緣があるやうな氣がして仕方がねえ。あいつが狂人になると同時に、私も盲目になつてしまつたんです。しかしその時私はどんなに狂人になつた句樂が羨ましかつたか知れやしねえ。あなたは盲目になつた時の心持をご存知ないでせうが、この位世の中に悲しいものはありやしませんせ。

新太郎。そりやあさうだらうなあ。

小しん。しかし狂人は好うござんすよ。世の中に狂人ぐらゐ自由な人間はありやあしねえ。何を云つたつて何をしたつて、ありやあ狂人だと云ふんで通つて往くんだ。考へて見りやあ句樂なんぞも、ずゐぶん勝手なことを云つたりしたりして來ましたせ。（思ひ出す如き顏付をして。）さうでしたなあ。始めて氣が狂つた時のことでしたよ。いきなり私の所へ飛び込んで來て、これから深川の不動樣へ往くから一所に來ねえかつて云ふんでせう。まあ、その時の形が不思議さね。何處で探して來たんだか、職工の着るやうな服を着て、箒を持つてゐるんですよ。何をしに往くんだつて云つたら、何しろ今の世の中には靈魂の粉が一杯に散つてゐるから、そいつ

を掃き集めに往くんだつて云ふんでせう。如何して深川の不動様へ往くんだつて聽くと、親分の家から掃除を始めるんだつて云やがるのさ。不動様を親分だと思つてゐやがるんだから面白いよ。

（急に悲しげに。）しかしもうその句樂にも會へねえんだなあ。

新太郎。句樂が掃除しないと世の中はまた靈魂の粉だらけになるせ。小しんさん、僕もちよつと病院へ往つて來るよ。（立ち上がつて）ああ、それから道で蝶丸に會つたから、ここに來いつて云つて置いたかゝ來るかも知れないよ。

小しん。（寂しさうに。）若旦那、もう少しここにゐて下さいな。私一人になると寂しくつて仕方がないから——

新太郎。さうかい。それぢやあもう少しゐやう。（おぎんに。）お前はもう歸つても好いよ。

（おぎんは挨拶して出でゆく。下手に入る。殆んど入れ違ひに蝶丸とその女房おせん出づ。蝶丸は盲目の新内語り。三十四五歳。おせんは二十五六歳。）

蝶丸。（格子戸の外より。）ご免下さいまし。

新太郎。（聲を聽き付けて。）誰だい、蝶丸さんかい。

蝶丸。へえ、左樣でございます。

おたつ。お上んなさいよ。

（蝶丸とおせんは家の中に入り。長火鉢の傍に坐る。）

小しん。蝶丸さん。句樂が死んだよ。

蝶丸　へえ、ほんとですかい。惜しいことをしましたな。

小しん。（何か考へつつ。）句樂は何が好きだつたかな。

蝶丸。さうさね。尾上伊太八――か新兵衛小女郎なんども好きのやうでしたね。

新太郎。句樂も旅に往つた人だ。『比翼の初旅』でもやつてもらはうぢやないか。

小しん。若旦那。さうしてこの新内を聽きながら思ふ存分私を泣かして下さい。ね、よござんすか。笑つちやいけませんぜ。私は今夜は泣きたくつて泣きたくつてたまらねえんだから――

新太郎。小しんさん。おれも一所に泣かうよ。それぢやあ、蝶丸さ

ん。『比翼の初旅』をやつて呉れないか。それが句樂紫君だつたらあいつも嬉しかつたらうになあ。

小しん。志道軒と一所に旅をしてゐる氣だから可哀さうですよ。

（蝶丸は歌ひ始む。おせんは三味線を彈く。）

蝶丸（歌ふ。）

戀の港にうち寄する浪の紋日の賑はひは、都に負けぬ色どころ、
三國と云へるわけざとは、北國一の遊女町、よねの情にかかり舟、
碇下さぬ客もなく、中に玉屋の新兵衛、今日もつくづく入相の、
鐘が敵の浮世とて、揚屋の不埒重なりし金の代りに手ばまつの、
粹が嵩じて水風呂の、桶伏せになる身ぞつらや、新兵衛おろおろ

涙ぐみ、ええ無念やなあ、この港で玉屋の新兵衛とて、人に知られた身なれども、色ゆゑに身代はぼうふり蟲同前に、桶の中にまいまいと、日影さへ見ぬ戀の闇、逢ひたい見たい太夫にも、同じ廓に居は居ながら、顔さへ見る目嗅ぐ鼻の、鴇母を初め主人夫婦が見るまへも、遠慮ありまの人形筆。

（小しんは烈しく泣く。新太郎獻欷す。新内の唄悲しげに續く。幕。）

珍書刊行會第三期新會員募集

珍書刊行會は過去三閲年に於ける業績によりて『模範的古書複刻』『愛書家の消費組合』等幾多の好評を博し今や煙滅せんとする江戸時代軟文學書の刊行を成就し東西兩大學、帝國圖書館等を始め弘く學界に頒布して創立當初の宣言に悖る事なきを得たり。爾來世に刊行會の流行を來して各種の部門に古書の複刻を見るに至りしは尠くとも學界の慶事と稱すべし。

然れども單に古書を複刻する事（複製）は聊か現代の文運と相距り來れるを觀、爰に新らたに第三期を創むるに當りては更

らに一歩を進みて古書を新刻するの用意を以てし眞に溫故知新の實を擧げんとす。これ顧問伊原青々園氏に囑して『芝居双紙』の撰定を請ひ、新たに劇文壇に才名を馳する小山内薫氏を煩はして『江戸趣味文庫』の監輯を需め、從來の編輯部員竹内學士、鈴木春浦氏の外、獨逸文學に造詣深き新進作家長田秀雄氏を聘し、主幹川上邦基氏を編輯專務とし、伊原小山内兩顧問が指導掖誘の下に此二大叢書の完成を期せんとす。

芝居双紙

は本邦古劇の沿革、故實より舞踊、出入、唄等舞臺の内外に渉ると共に名脚本數種を撰び、時代を區劃すべき代表的繪番附（原本同型）の複刻に及び、尙年譜と劇書解題との編纂を成就して眞に日本歌舞伎劇研究者の一大參考書たらしめんとし

江戸趣味文庫

は『江戸情話』に意氣、張り、達引を生命とせる若き女及びこれと相縺るゝ若き男との物語を江戸作者の傑作に撰み、『江戸長唄』は本會前期以來の事業を繼いて唯一の編年體長唄全集たるべく『江戸の男女』『江戸の名所』に流れも淸き德川の古きを忍び安藤廣重が名作『江戸近郊八景』によりて遺憾なく天下の美術好愛者

を魅し『江戸巷談』に卷帙浩翰なる幾多の隨筆叢書を獵りて珍談奇聞を收輯すべし。

殊に入會金を撤廢せる外、會員に數多の特典を與へ、二書共孰れをも撰むを得せしめし等、再び世の刊行會なるものに魁して種々の新例を開けり。これ何等書肆の後楯なき素人の仕事にして、たゞ印刷實費頒布制を布ける愛書家の集團たる本會にして始めて成し能ふ所たるべし。

規則摘要

□會　期……一ヶ年

□配本開始……大正五年五月初旬より

□刊　本……毎月二回、芝居双紙、江戸趣味文庫交互に刊行

■裝　釘……布裝、純良日本紙袋綴、和洋折衷美本

■頁　數……毎篇約二百五十頁内外

■用　紙……本會特約大倉工場手漉純良日本紙

□入會金……不要

□會　費……芝居双紙又は江戸趣味文庫の一方のみを望む時一ヶ月金壹圓同上の二書を共に望む時は一ヶ月金壹圓七拾錢（毎月二回配本毎に分納する時は金八拾五錢宛）

□割　引……一種希望者全期（十二回分）前納金十一圓
二種希望者全期（二十四回分）前納金二十圓

□送　料……市内無料◉内地一册金八錢◉臺灣樺太金二十錢
◉支那朝鮮金三十錢

東京市京橋區柳町二番地
珍書刊行會
電話京橋三〇二二番
振替東京四七八五番

吉井勇著

俳諧亭句樂

大正五年五月二十日印刷
大正五年五月廿四日發行

定價一册四拾五錢

發行兼編輯人 竹内謙六 東京市牛込區船河原町十二番地

印刷人 森川修一 東京市神田區西小川町二丁目六番地

印刷所 大精社 東京市神田區西小川町二丁目六番地

發兌元 通一舍 東京市京橋區柳町二番地 電話京橋三〇二二番 振替東京六九三四番

大賣捌 大阪屋號書店 東京市日本橋區北鞘町 電話本局三七三七番

2163
184

終